

第 160 図 SD3003~3007・3009~3019 出土遺物実測図 (S : 1/4)

SD3008 (第 148・161・162 図)

調査区北西隅から南東隅において検出した溝であり、SD 3001・3004~3007・3009に切られ、SD 3021と重複する。本溝は、西隣する6 T区に検出したSD 6001と東隣する小山・南谷遺跡のSD 739と同一遺構である。本溝より派生するSD 3021は、6 T区のSD 6002と同一であり、SB 3002を方形に囲んでいる。SD 3008・3021とSD 6001・6002の平面図を合体させたのが第161図である。本溝の検出した標高は3.90~4.80 mである。溝の方位はN-100°-Eであり、若干蛇行する。溝の東端では東側に延びる溝と南側に延びる溝が分岐する。本調査区内では本溝とSD

3002の方位は若干異なっているが、小山・南谷遺跡を含めた広範囲に見るとこの2本の溝は平行して延びる。溝の幅は2.00～4.70 m、検出面からの深さは0.10～0.70 mを測る。底面東端の標高は4.39 m、西端は3.13 mであり、底面は東から西に向かって下がる。溝の規模は西になるにしたがい大きくなる。断面は船底形を呈し、緩やかな傾斜である。埋土は6層であり、レンズ状堆積を呈する。

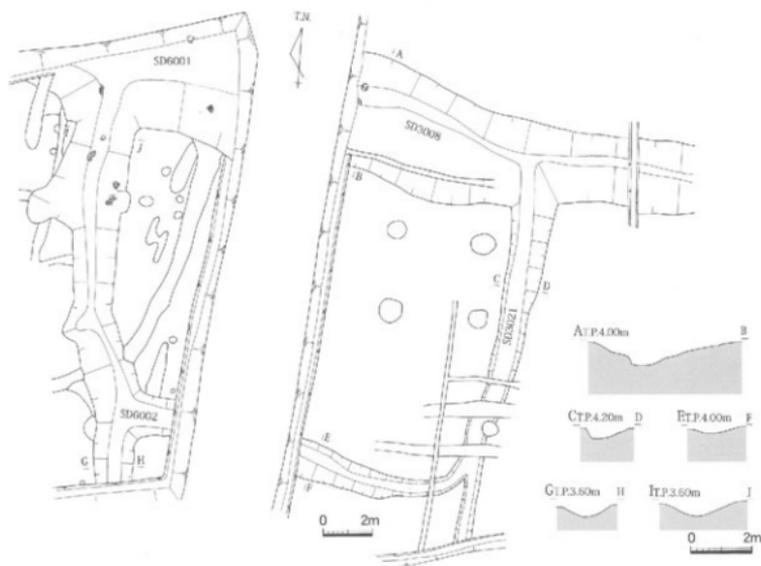
遺物は、土師器皿(1164)、同鍋(1165)、須恵器杯蓋(1166・1167)、同杯(1168)、同壺(1169・1170)、製塩土器(1171)、飯蛸壺(1172～1175)、土錘(1176)、噴石(1177)、弥生土器壺(1178)、同高杯(1179)、同甕(1180～1182)である。

1164は器高1.8 cmで外面に浅い沈線を有する。1165は口縁部が大きく外に広がり、体部外面に縦方向のハケ、内面に板ナデ・ハケが施される。

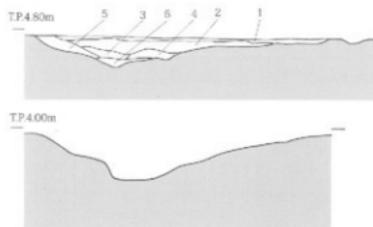
1167は天井部と口縁部の境に僅かな稜を有する。1168は低い高台を持ち、底面に回転ヘラキリ後にナデが施される。1169は口縁部が大きく外に広がり、内面に自然釉がかかる。1170は口縁部が内側に若干拡張し、外面に沈線を巡らす。

1171は内外面に指頭圧痕が施される。1176は管状土錘である。

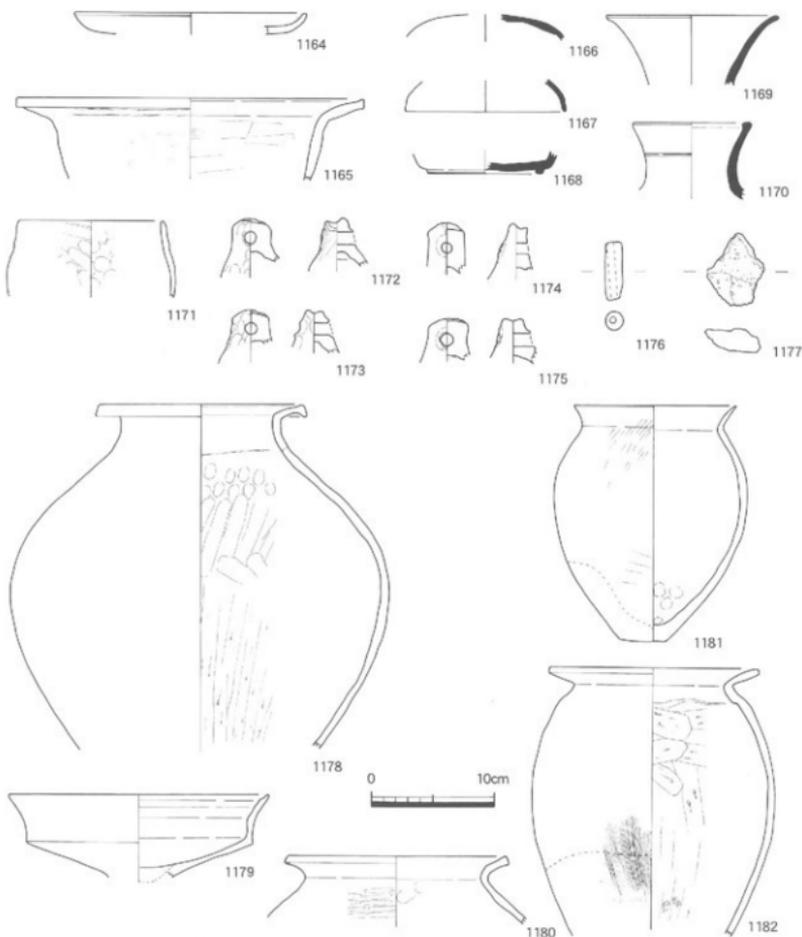
1178の口縁部はほぼ水平に広がり、口縁端部は上下に拡張する。体部内面上半は指頭圧痕・指ナデ、下半はヘラケズリが施される。1179は口縁部内面に擬凹線が巡る。1180の口縁部は体部から鋭角に屈曲し、体部外面に平行タタキが施される。1181は「く」の字状口縁で、口縁端部は薄くなる。体部外面上位は平行タタキ、下半はヘラケズリが施され、黒斑が付く。1182は口縁部が体部から鋭角に屈曲し、体部外面下半にヘラミガキ、内面上半は横方向のヘラケズリ、下半は縦方向のヘラケズリが施される。外面下半に黒斑が付く。



第161図 SD3008・3021・6001・6002平・断面図(S:1/200, 1/160)



1. 灰黄褐色シルト質粗砂+灰白色粗砂 (10YR4/2-8/1)
2. 黒褐色シルト質粗砂 (7.5YR3/1)
3. 灰白色シルト質粗砂+淡黄褐色粗砂 (10YR5/1-2.5Y7/3)
4. 淡黄褐色粗砂 (2.5Y7/3)
5. 灰白色シルト質粗砂+淡黄褐色粗砂 (10YR5/1-2.5Y7/3)
6. 灰白色粗砂 (2.5Y7/1) 粒子が細かい



第 162 図 SD3008 断面図及び出土遺物実測図 (S : 1/8 O. 1/4)

SD3021 (第 161・163 図)

調査区西側において検出した溝であり、S D 3005・3010、S K 3008 に切られ、S D 3008 と重複する。本溝は S D 3008 から派生し、南方に延び、南端では西方に延びる溝と分岐する。西隣する 6 工区の S D 6002 と同一遺構であり、S B 3002 を方形に囲んでいる。検出した標高は 3.86 ～ 4.10 m である。南北方向の溝の方位は $N-11^{\circ}-E$ である。溝の幅は 0.60 ～ 1.80 m、検出面からの深さは 0.12 ～ 0.43 m を測る。断面は船底形を呈し、底面のレベルは南から北方向と東から西方向に向かって低くなる。

遺物は、土師器甕 (1183)、須恵器杯 (1184)、同提瓶 (1185) である。



第 163 図 SD3021 出土遺物実測図 (S : 1/4)

SD3022 (第 148・164 図)

調査区中央において検出した溝であり、S D 3003・3011・3012・3016 に切られる。検出した標高は 4.20 m 前後である。溝の方位は $N-38^{\circ}-E$ である。溝の幅は 1.40 ～ 2.30 m、検出面からの深さは 0.30 m を測る。断面は船底形を呈する。

遺物は、須恵器杯 (1186) である。



第 164 図 SD3022 断面図及び出土遺物実測図 (S : 1/40, 1/4)

SD3023 (第 154 図)

調査区北西隅と北東隅において検出した溝であり、小山・南谷遺跡の S D 705 と同一遺構である。S D 3002 に切られるため検出できたのは溝の一部である。検出した標高は 4.04 m と 4.80 m である。検出面からの深さは 0.35 ～ 0.40 m を測る。遺物は出土していない。

(3) 土坑

SK3001 (第 165 図)

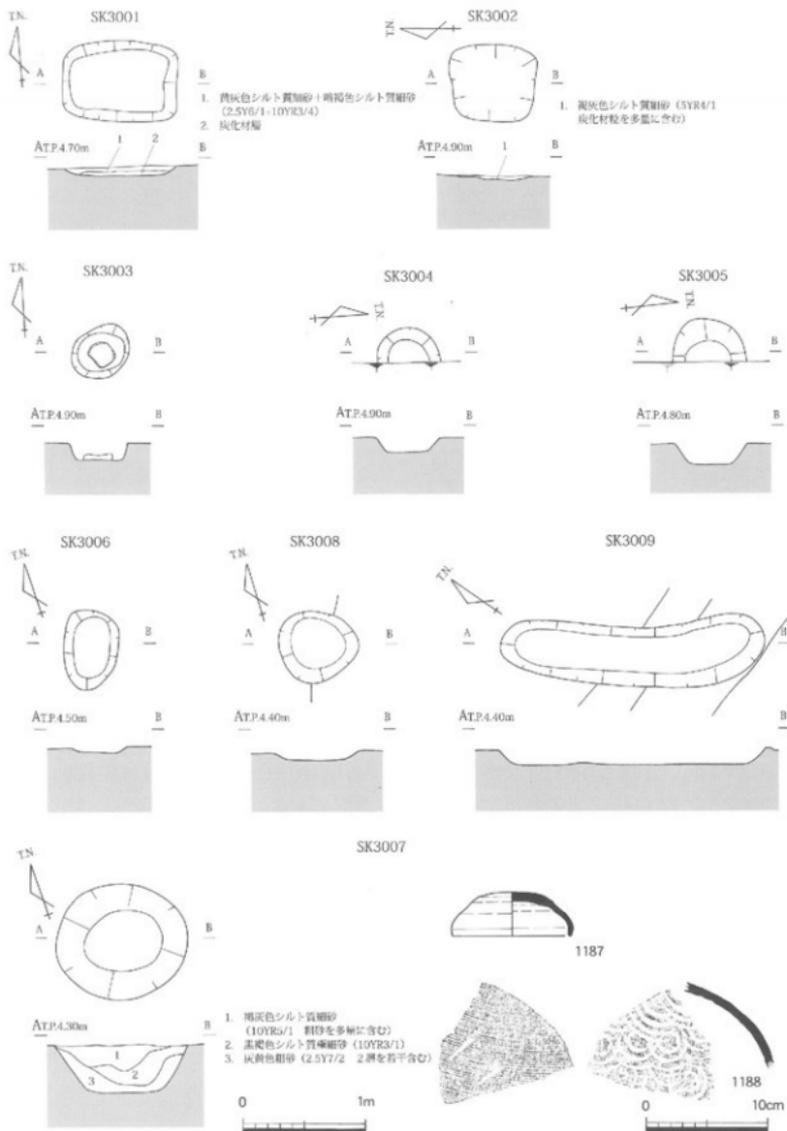
調査区南東側において検出した土坑である。検出した標高は 4.62 m である。平面形は隅丸方形を呈し、規模は東西方向の長軸 0.94 m、南北方向の短軸 0.67 m、検出面からの深さ 0.08 m を測る。断面は逆台形を呈する。遺物は、土師質土器甕の小片が出土する。

SK3002 (第 165 図)

調査区東側中央において検出した土坑である。検出した標高は 4.80 m である。平面形は隅丸方形を呈し、規模は東西方向の長軸 0.67 m、南北方向の短軸 0.63 m、検出面からの深さ 0.03 m を測る。埋土は炭化材粒を含む褐灰色シルト質細砂である。遺物は出土していない。

SK3003 (第 165 図)

調査区東側中央において検出した土坑である。検出した標高は 4.76 m である。平面形は不整な円形を呈し、規模は直径 0.50 m、検出面からの深さ 0.14 m を測る。底面直上には石が検出された。柱穴である可能性も考えられる。遺物は出土していない。



第 165 図 3 工区 SK 平・断面図及び出土遺物実測図 (S : 1/40, 1/4)

SK3004 (第 165 図)

調査区東端中央において検出した土坑であり、東半分は調査区外である。検出した標高は 4.80 m である。平面形は円形を呈し、規模は直径 0.5 4 m、検出面からの深さ 0.12 m を測る。柱穴である可能性も考えられる。遺物は、土師質土器甕や須恵器杯の小片のみである。

SK3005 (第 165 図)

調査区南東隅において検出した土坑であり、東半分は調査区外である。検出した標高は 4.65 m である。平面形は円形を呈し、規模は直径 0.62 m、検出面からの深さ 0.17 m を測る。柱穴である可能性も考えられる。遺物は出土していない。

SK3006 (第 165 図)

調査区中央において検出した土坑である。検出した標高は 4.35 m である。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は南北方向の長軸 0.64 m、東西方向の短軸 0.45 m、検出面からの深さ 0.04 m を測る。遺物は出土していない。

SK3007 (第 165 図)

調査区中央において検出した土坑であり、S D 3018 を切る。検出した標高は 4.24 m である。平面形は楕円形を呈し、規模は東西方向の長軸 1.10 m、南北方向の短軸 0.95 m、検出面からの深さ 0.39 m を測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は、須恵器杯蓋 (1187)、同甕 (1188) である。1187 は口縁部が直立し、天井部外面に切り離し後にナデが施される。1188 は外面に格子目のタタキ後にカキ目、内面に当て具痕が残される。

SK3008 (第 165 図)

調査区南西側において検出した土坑であり、S D 3021 を切る。検出した標高は 4.22 m である。平面形は不整な円形を呈し、規模は直径 0.62 m、検出面からの深さ 0.07 m を測る。遺物はない。

SK3009 (第 165 図)

調査区南西側において検出した土坑であり、犁跡に切られる。検出した標高は 4.22 m である。平面形は細長い楕円形を呈し、規模は長軸 2.18 m、短軸 0.48 m、検出面からの深さ 0.13 m を測る。遺物は、土師質土器甕の小片のみである。

2 江戸時代

(1) 犁跡

犁跡 (第 166 図)

調査区中央において検出した犁跡である。検出面のレベルは標高 4.20 ~ 4.35 m である。犁跡は東西方向に延びるものが大部分であるが、南北方向に延びる犁もある。幅は 10 ~ 30cm、深さは 2cm を測る。埋土は灰白色シルト質細砂の単一層である。

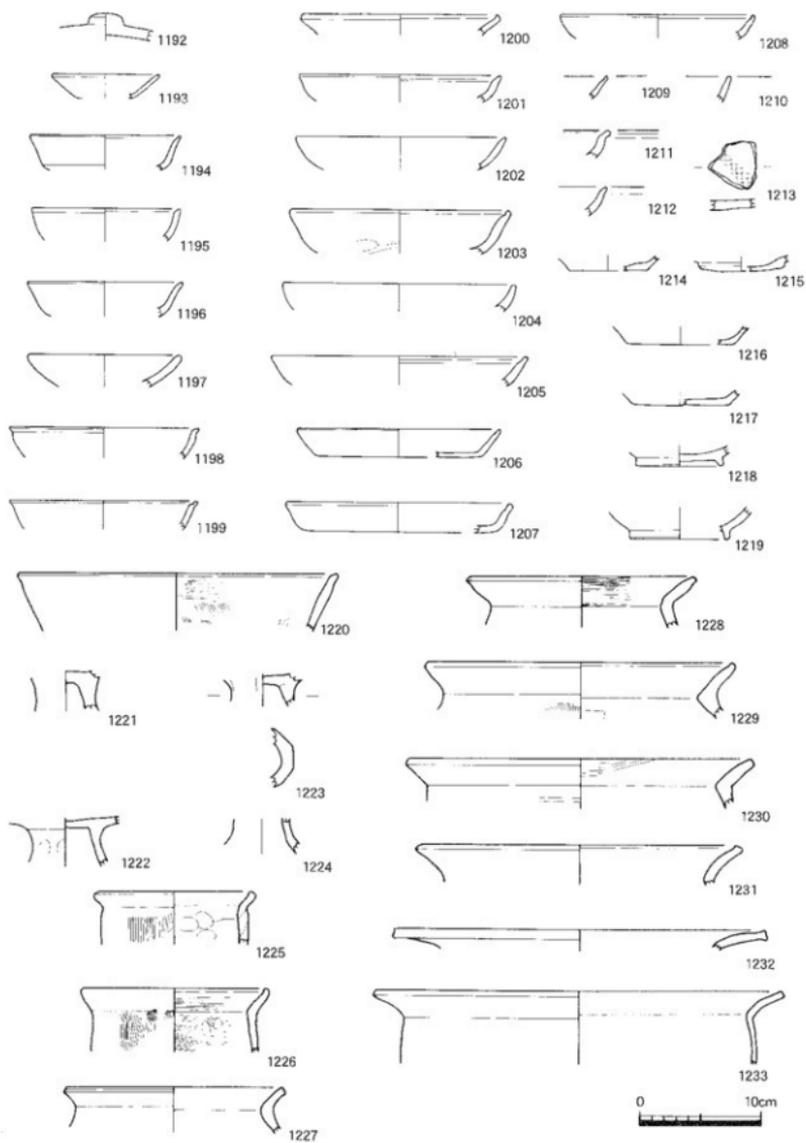
凶化した遺物は、須恵器杯蓋 (1189)、同杯 (1190・1191) であるが、その他に陶磁器の小片が出土している。



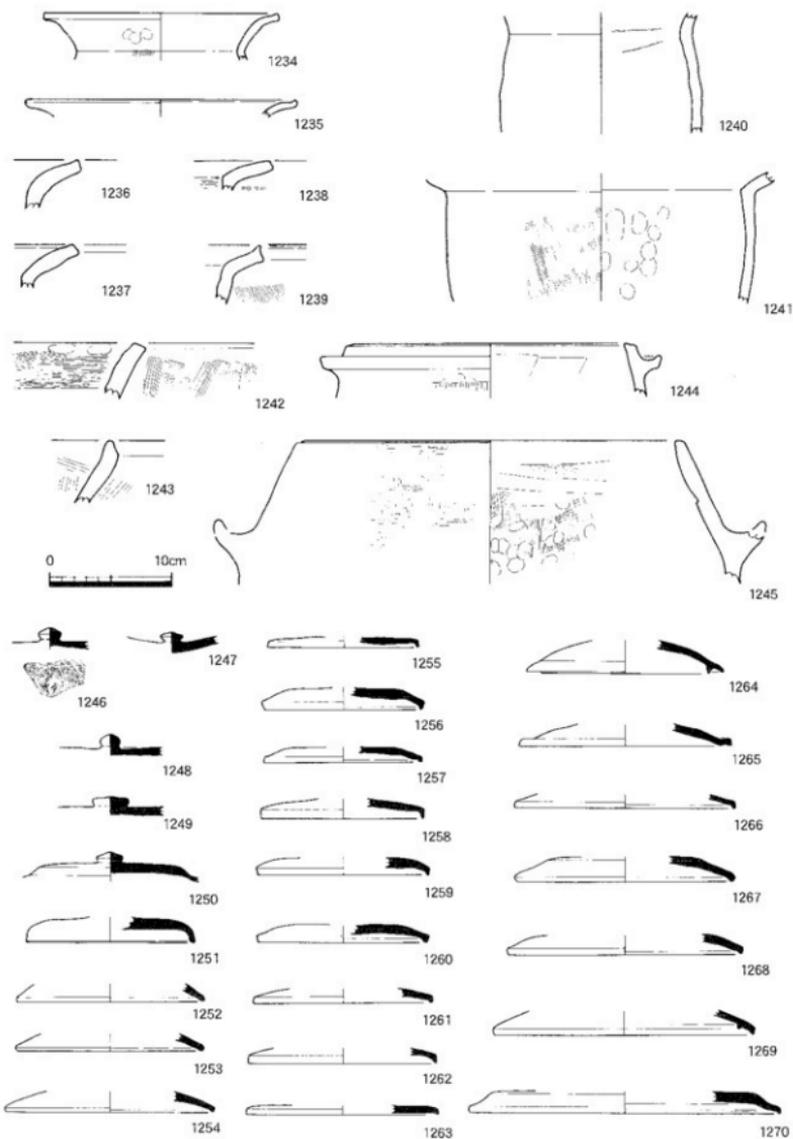
第 166 図 犁跡出土遺物実測図 (S : 1/4)

3 3 工区包含層出土遺物 (第 167 ~ 171 図)

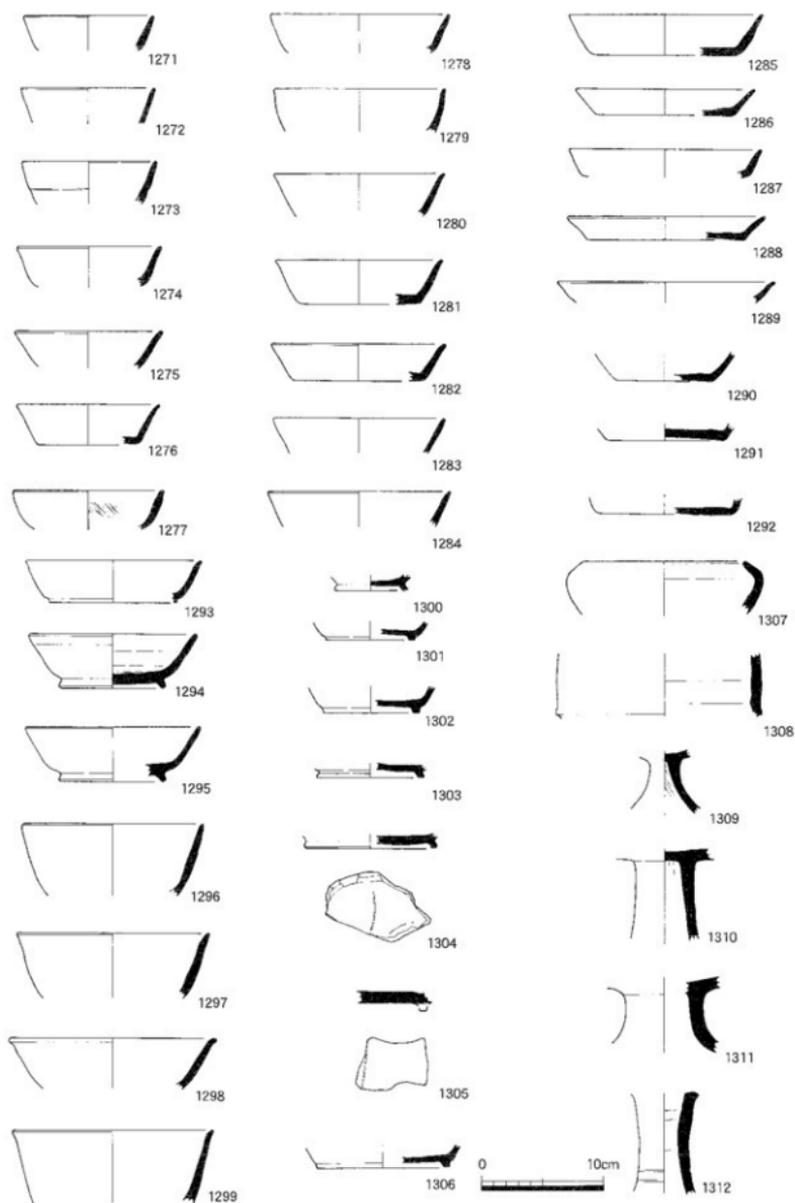
1192 は土師器杯蓋、1193 ~ 1205・1209 ~ 1217 は同杯、1218・1219 は同碗である。1193 は小形の杯であり、1194・1195・1199・1200・1201・1203・1205 は口縁部内面に沈線状の



第 167 图 3 工区包含层出土器物实测图 (1) (S : 1/4)



第 168 图 3 工区包含层出土文物实测图 (2) (S : 1/4)



第 169 图 3 工区包含层出土遗物实测图 (3) (S : 1/4)

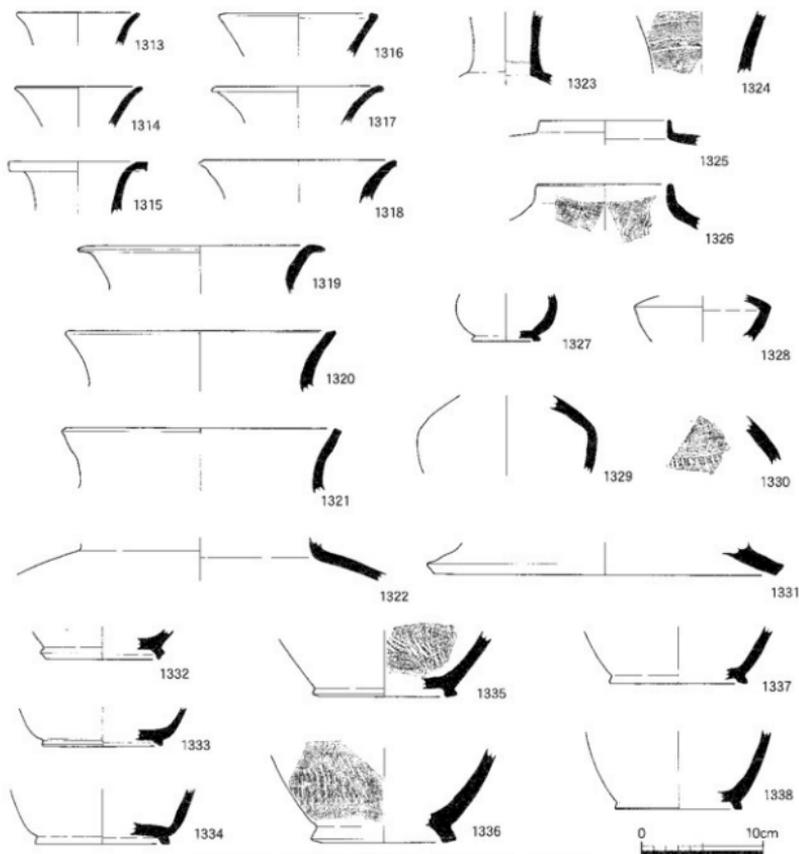
口縁部を若干外反し，1198・1211の口縁端部はやや強く外方に屈曲する。1213は杯の底部であり内面に漆が付着している。1215は台状の底部，1217は底面に回転ヘラキリ後にナデが施される。1206～1208は土師器皿で，口縁端部内面に沈線状の凹みを巡らす。1218・1219は高台を有する黒色土器A類である。

1220は土師器鉢であり，内面に横方向と縦方向のハケが施される。

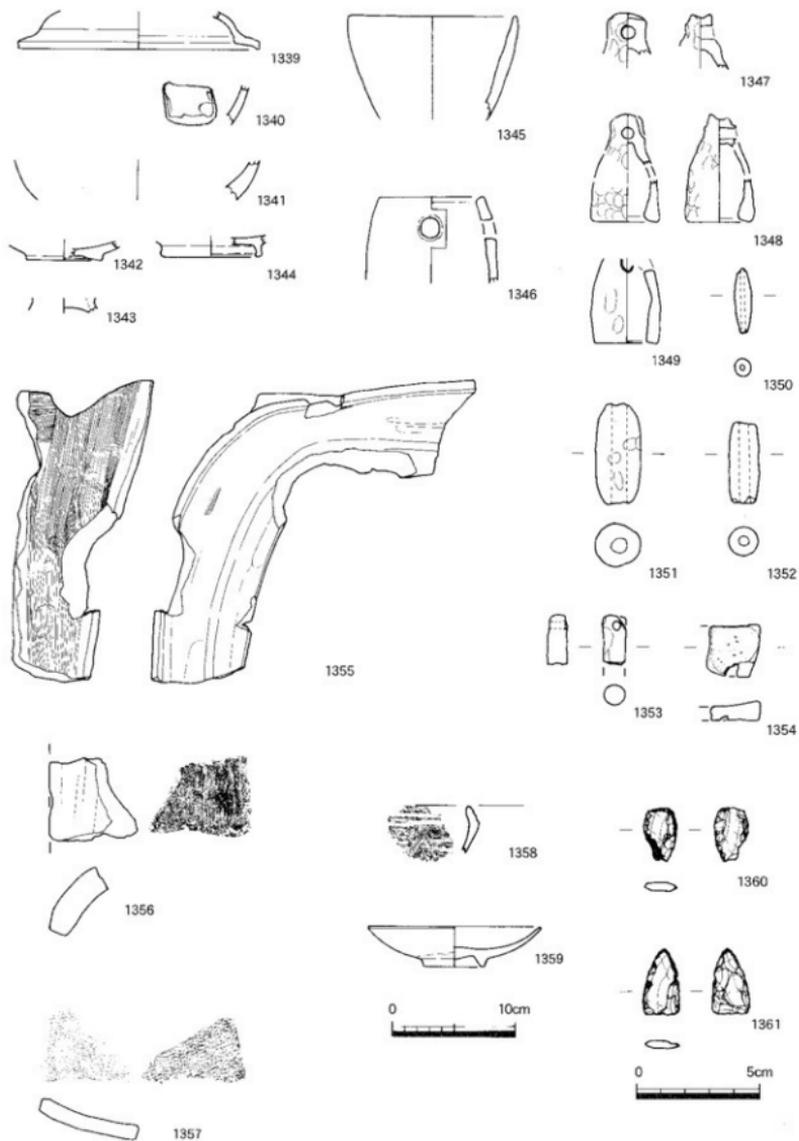
1221～1224は土師器高杯であり，1223は面取りされている。

1225～1237・1240・1241は土師器甕である。1225・1226は口縁端部を上方に若干拡張し，体部外面に太いハケが施される。1227～1231・1234は「く」の字状口縁で，1228～1230・1234はハケが施される。1232・1233・1235の口縁部は大きく外に広がる。1240・1241は長胴で，外面にハケ，内面に指頭圧痕が施される。

1238・1239・1242～1244は土師器鍋であり，ハケが施され，1239は口縁端部を上方に摘み上げる。1244は水平方向に鐳が付く。1245は土師質土器瓶で，内外面にハケが施される。



第170図 3工区包含層出土遺物実測図(4)(S:1/4)



第 171 图 3 工区包含层出土遗物实测图 (5) (S : 1/4, 1/2)

1246～1251は宝珠形橋みのある須恵器蓋で、1246は内面にヘラ記号がある。1252～1270は須恵器杯蓋であり、短い返りのある1264・1269以外は、口縁端部が短く下方に屈曲する。

1271～1285・1290～1306は須恵器杯であり、直線的に口縁端部にいたる器形と口縁端部が僅かに外反する器形、体部が内湾気味の器形がある。1281は底面に切り離し後にナデ、1282・1290はナデ、1285は底面に回転ヘラキリ、1291・1292は回転ヘラキリ後にナデが施される。1293～1295・1300～1306は高台を有し、1294の底面は切り離し後にナデ、1301は回転ヘラキリ後にナデ、1302・1306はナデ、1304・1305は回転ヘラナデ後にヘラ記号が施される。1305は内面が非常に滑らかであり、転用碗の可能性がある。1296～1299は器高の高い杯である。1286～1289は須恵器皿であり、1286・1288は底部に回転ヘラキリ後にナデが施される。

1307は須恵器鉢で、口縁部は内傾する。1308は須恵器碗である。1309～1312は須恵器高杯であり、1309は絞り目があり、1312は外面に沈線2条が巡る。

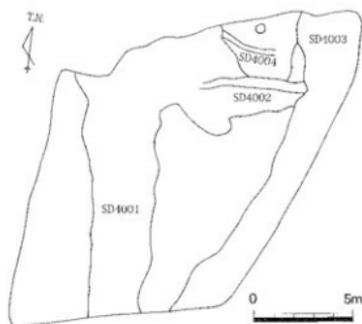
1313～1320・1323～1331は須恵器壺である。1313・1314は内面、1223は外面に自然釉がかかる。1324は内外面に自然釉がかかり、直線文と波状文が施される。1325・1326は短頸壺、1327・1328は小形壺、1331は脚付壺である。1321・1322は須恵器甕である。

1339は灰釉陶器蓋、1340・1341は青磁碗、1342は緑釉陶器皿、1343・1344は緑釉陶器碗である。1344は内面に重ね焼き痕がある。

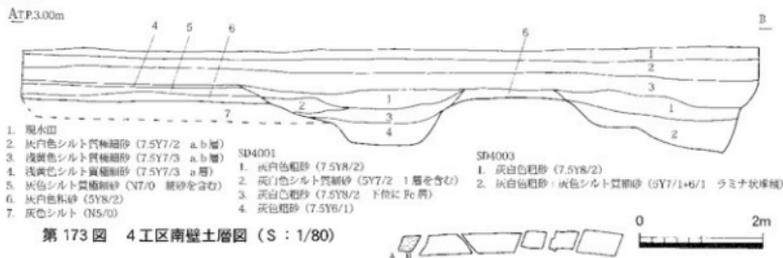
1345は製塩土器、1346は蛸壺、1347～1349は飯蛸壺、1350～1352は管状土鍾、1353は有孔棒状土鍾である。1354は砥石である。1355はカマドである。1356は丸瓦、1357は平瓦である。1356は縄文土器浅鉢である。1359は初期伊万里焼の皿である。1360・1361はサヌカイト製の石籤である。

4. 4 T区

4 T区は本遺跡の西端に位置する。調査区の平面形は台形を呈し、北側の長さは約17.00 m、南側は約12.20 m、幅は約16.20 mである。調査区中央の南北軸座標値は $X = 146.760$ 、東西軸座標値は $Y = 55.670$ である。東端は現行水路に区画される。4 T区より西側は、試掘調査では洪水砂層が厚く堆積し、遺構・遺物はほとんど検出されなかった。基本土層は、現水田耕作上と2枚の近世糸里型水田が堆積し、検出面は砂層である。



第172図 4 T区遺構配置図 (S : 1/250)



1 古代

(1) 溝

SD4001 (第172～174図)

調査区西側において検出した溝であり、北端でSD 4002と合流する。第173図土層図では溝は第4層上面から掘り込んでいるが、調査時に第7層まで掘り下げたため検出した標高は1.50m～1.75mとなる。溝の方位はN-7°-Wである。溝の幅は約2.60～7.60mを測り、北になるにしたがい幅広くなる。深さは0.60～0.90mを測る。断面は船底形を呈し、底面のレベルは南から北に緩やかに低くなる。

遺物は、土師器杯(1362～1364)、同甕(1365)、須恵器杯蓋(1366～1368)、同杯(1369～1372)、同壺(1373)、同甕(1374・1375)、弥生土器壺(1376)である。

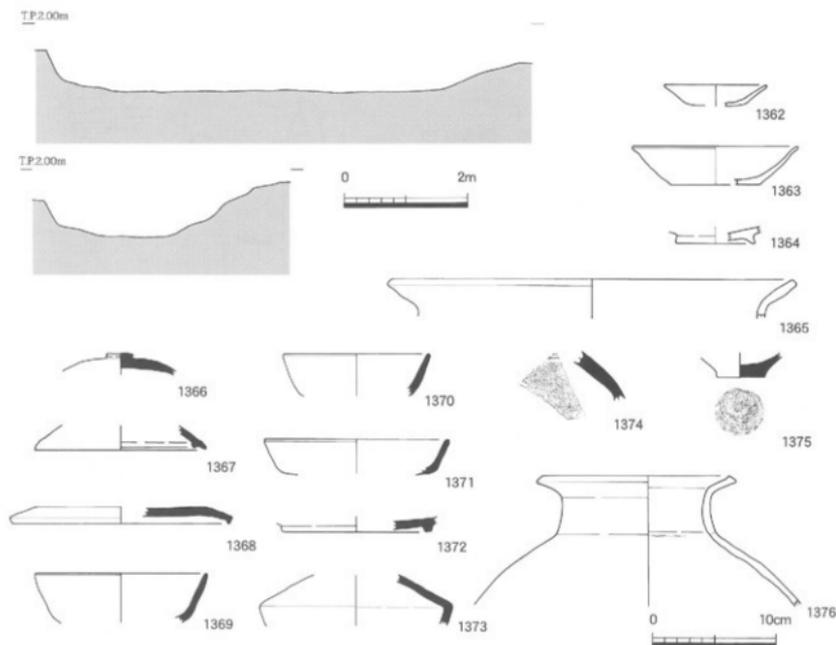
1362は小形の杯であり、底面はナデが施される。1363は若干外反気味の口縁部であり、底面に回転ヘラキリが施される。1364は高台を有する。

1366は低い宝珠形の摘みを有し、1367は口縁部内面に短い返りを持つ。1368の口縁端部は短く下方に屈曲し、天井部外面に回転ヘラケズリ、内面に指ナデが施される。

1369～1371は直線的な体部であり、1372は断面四角形の高台を有する。

1373は肩が大きく張り、外面上位には部分的に軸がかかる。1374は外面に沈線と波状文が巡り、1375の底面は回転糸切りが施される。

1376の頸部が直立し、口縁部は大きく外に広がる。



第174図 SD4001断面図及び出土遺物実測図 (S: 1/80, 1/4)

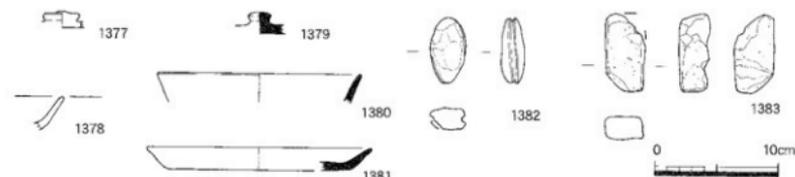
SD4002 (第 172・175 図)

調査区北東側において検出した溝であり、SD 4001 と SD 4003 を繋ぐ位置にある。検出した標高は 1.30 m と 1.50 m である。溝の方位は $N-90^{\circ}-E$ である。溝の幅は 1.50 ~ 3.70 m を測り、溝上位の掘り込みは緩やかであるが、北岸寄りの最深部ではやや急傾斜となる。検出面からの深さは 0.50 m を測る。断面は船底形を呈し、底面は平坦である。埋土は灰白色粗砂の単一層である。

遺物は、土師器杯蓋 (1377)、同杯 (1378)、須恵器杯蓋 (1379)、同杯 (1380)、同皿 (1381)、土錘 (1382)、軽石 (1383) である。

1378 は直線的な体部である。

1381 は底面にナデが施される。1382 は有溝土錘である。1383 は側面を面取りする。



第 175 図 SD4002 出土遺物実測図 (S : 1/4)

SD4003 (第 172・173・176 図)

調査区東端において検出した南北方向に延びる溝であり、西側の掘り込みと底部の一部を検出したのみである。第 173 岡土層図では溝は第 4 層上面から掘り込まれているが、調査時に第 7 層まで掘り下げたため検出した標高は 1.50 ~ 1.75 m となる。溝の方位は $N-23^{\circ}-E$ であり、中央で僅かに屈曲する。検出した溝の幅は 3.30 m、深さは 0.60 m を測る。断面は逆台形を呈し、底面のレベルは南から北に 0.20 m の比高差で緩やかに低くなる。

遺物は、土師器杯 (1384 ~ 1387)、同甕 (1388)、須恵器杯蓋 (1389・1390)、同杯 (1391)、同壺 (1392)、弥生土器甕 (1393)、カマド (1394)、平瓦 (1395) である。

1384 は直線的な体部であり、1385 は底部から緩やかな傾斜で体部が立ち上がり口縁部にいたる。1387 は底面に回転ヘラキリ後にナデが施される。

1389 は宝珠形摘みを有し、天井部外面に回転ヘラケズリが施される。1390 は天井部外面に軸がかり、内面にはヘラ記号がある。

1391 はやや高い高台を持ち、口縁部はやや外反気味である。

1392 は肩が張り、外面に自然軸が部分的に残存する。

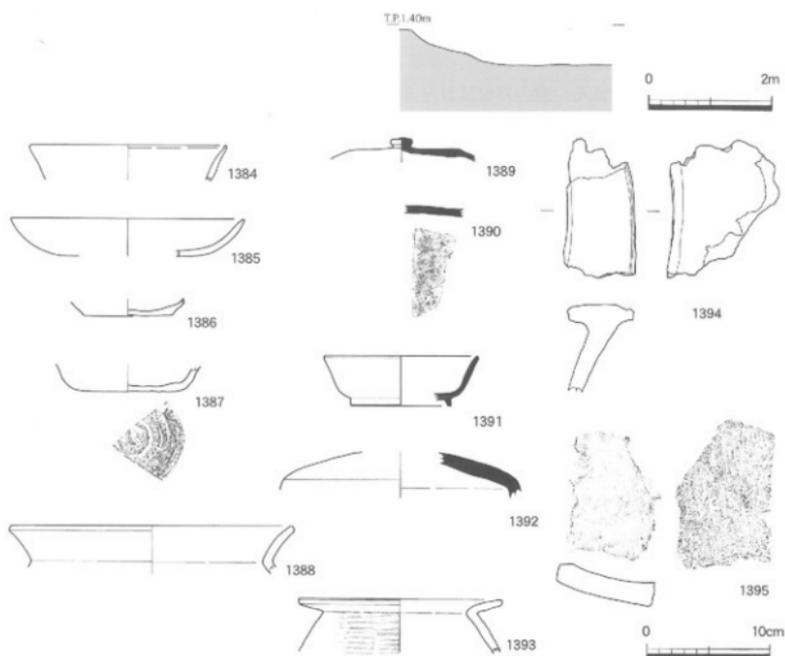
1393 は口縁部が鋭角に屈曲し、体部外面に平行目のタキが施される。

1395 は門面の布目上にヘラナデが施され、凸面にゴザ目が残される。

SD4004 (第 172 図)

調査区北東側において検出した溝である。検出した標高は 1.34 m である。溝の方位は $N-75^{\circ}-W$ であり、中央において僅かに屈曲する。溝の幅は 0.20 ~ 0.30 m、検出面からの深さは 0.10 m を測る。断面は逆台形を呈する。底面のレベルは東から西に向かって非常に僅かに低くなる。埋土は灰白色粗砂の単一層である。

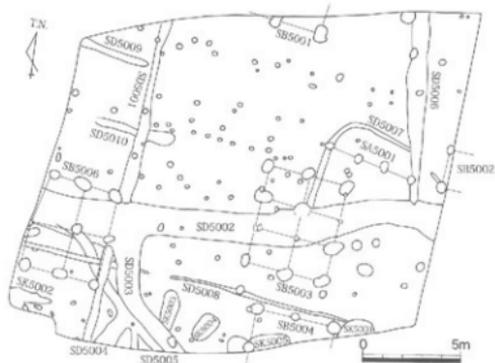
遺物は数点の土師器と須恵器小片のみである。



第176図 SD4003断面図及び出土遺物実測図 (S : 1/80. 1/4)

5. 5工区

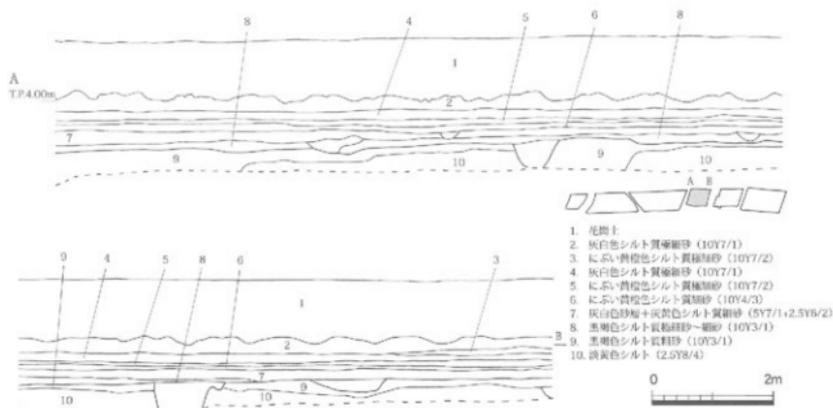
5工区は本遺跡の中央東寄りに位置し、2工区と6工区の間である。調査区の平面形は長方形を呈し、東西方向の全長は約21.70m、南北は約19.00mである。他の工区に比べて幅が狭いのは、調査区南側にある住宅を保全するためである。調査区中央の南北軸座標値は $X = 146.780$ 、東西軸座標値は $Y = 55.800$ である。西端は細い農道と水路に、東端は現有道路に区画されている。



第177図 5工区遺構配置図 (S : 1/250)

遺構面は1面であり、現地表面からの深さは約1.65mである。遺構面のレベルは標高3.20～3.50mであり、東から西に下がる。遺構は古代の掘立柱建物跡・溝・土坑と江戸時代の土坑・柱穴が調査区全域に検出された。

調査区全体の土層は、現地表面から約1.00mの深さまで花崗土に埋め立てられ、その下に5枚の近世条里型水田がほぼ水平に堆積し、その下が黒褐色シルト質細砂の遺構面となる。



第178図 5工区北壁土層図 (S : 1/80)

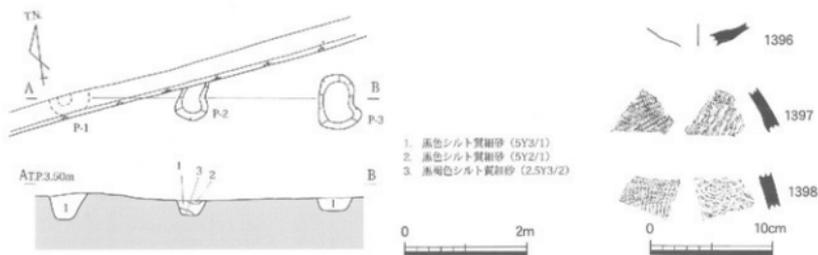
1 古代

(1) 掘立柱建物跡

SB5001 (第179図)

調査区中央北端において検出した掘立柱建物跡であり、南列側柱のみの検出である。検出した標高は3.30 mである。検出した規模は東西2間(5.00 m)であり、芯芯間距離は約2.30 mを測る。南列側柱の方は $N-85^{\circ}-W$ である。柱穴の平面形は不整な楕円形を呈し、長軸0.92 m、短軸0.56 mを測る。検出面からの深さは0.20~0.43 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は、須恵器高杯(1396)、同聚(1397・1398)。

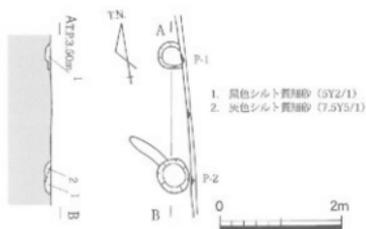


第179図 SB5001平・断面図及び出土遺物実測図 (S : 1/80, 1/4)

SB5002 (第180図)

調査区東端中央に検出した掘立柱建物跡であり、西列側柱のみの検出である。検出した標高は3.35 mである。検出した規模は東西1間(2.50 m)であり、方位は $N-8^{\circ}-E$ である。平面形は円形を呈し、直径0.57 mを測る。深さは0.10 mを測る。

遺物は、数点の土師器小片である。



第180図 SB5002平・断面図 (S : 1/80)

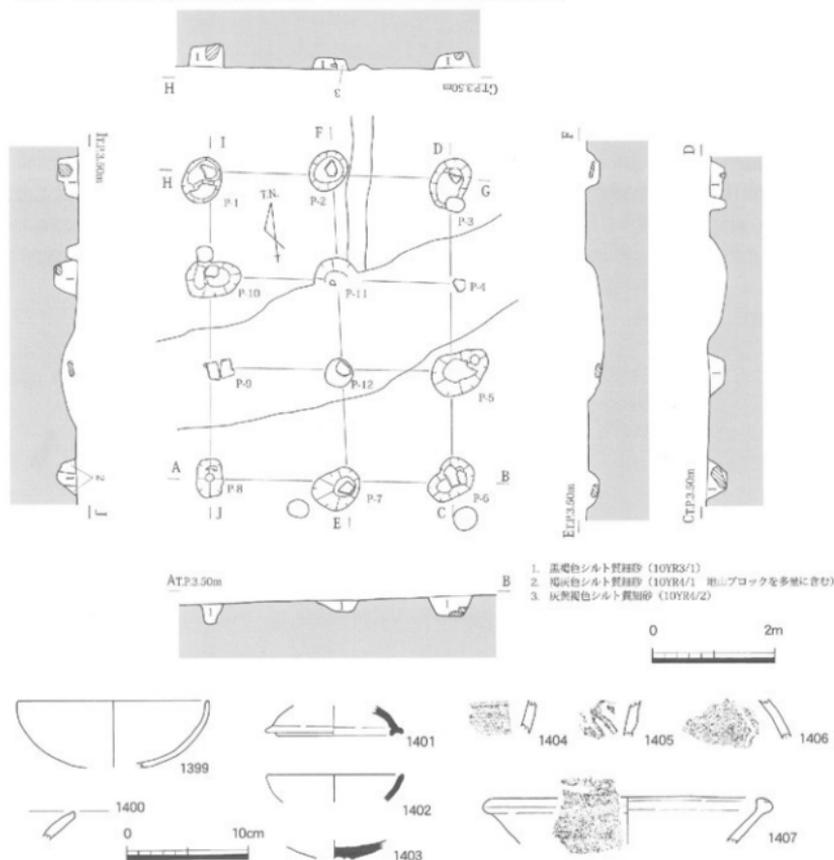
SB5003 (第181図)

調査区中央において検出した総柱の掘立柱建物跡であり、SD 5002を切る。検出した標高は3.30～3.45 mである。規模は東西2間、南北4間(4.70×5.62 m)であり、東西方向の芯芯間距離は2.10 m、南北の芯芯間距離は1.30～2.00 mを測る。建物の主軸方位はN-5°-Eである。柱穴の平面形は不整な円形・楕円形を呈し、直径は0.57～0.99 mを測る。深さは0.16～0.40 mを測る。断面は逆台形を呈し、P-1・5・8・10は底面に段を有する。P-1～4・6・7・9～12の底面直上ないし埋土中に根石が残存する。P-8は土層断面に柱痕がある。

遺物は、土師器椀(1399)、同襖(1400)、須恵器杯蓋(1401)、同杯(1402)、同高杯(1403)、縄文土器浅鉢(1404～1407)である。

1399は半球状の体部で、口縁部は短く直立する。1401は口縁部内面に短い返りが付く。

1405・1406は外面に沈線が施され、1407は口縁端部が拡張する。

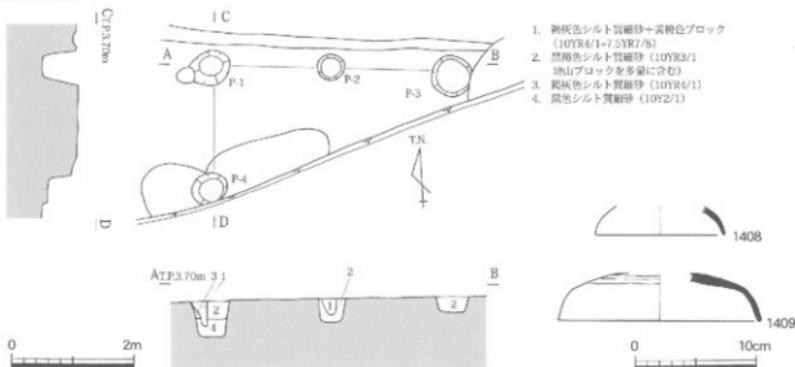


第181図 SB5003平・断面図及び出土遺物実測図 (S: 1/80, 1/4)

SB5004 (第182図)

調査区南西隅において検出した掘立柱建物跡であり、S K 5005 に切られる。検出した標高は 3.47 m である。4本の柱穴のみの検出であり、本遺構の大半は南側の調査区外に延びる。検出した規模は東西2間(4.65 m)、南北1間(2.55 m)であり、芯芯間距離は 2.00 m を測る。北列側柱の方は、 $N-83^{\circ}-W$ である。柱穴の平面形は円形を呈し、直径 0.45 ~ 0.65 m を測る。検出面からの深さは 0.26 ~ 0.62 m を測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は、須恵器杯蓋(1408・1409)である。1409 はやや長い口縁部で天井部外面にヘラケズリが施される。



第182図 SB5004 平・断面図及び出土遺物実測図 (S : 1/80, 1/4)

SB5006 (第183図)

調査区南西隅において検出した総柱の掘立柱建物跡であり、S D 5002 を切り、S D 5001 に切られる。検出した標高は 3.20 m である。本遺構は西側の調査区外に広がる可能性がある。検出した規模は東西2間(4.20 m)、南北2間(5.25 m)であり、東西方向の芯芯間距離は 1.80 m、南北の芯芯間距離は 2.40 m を測る。P-1・2間は 1.55 m である。建物の東列側柱の方は $N-9^{\circ}-E$ である。柱穴の平面形は不整な円形・楕円形を呈し、直径は 0.55 ~ 0.90 m を測る。深さは 0.20 ~ 0.50 m を測る。断面は逆台形を呈する。埋土は 2層あるが、黒褐色シルト質細砂の単一層の柱穴が大半である。

遺物は、土師器鉢(1410)、須恵器杯(1411)、同壺(1412)である。

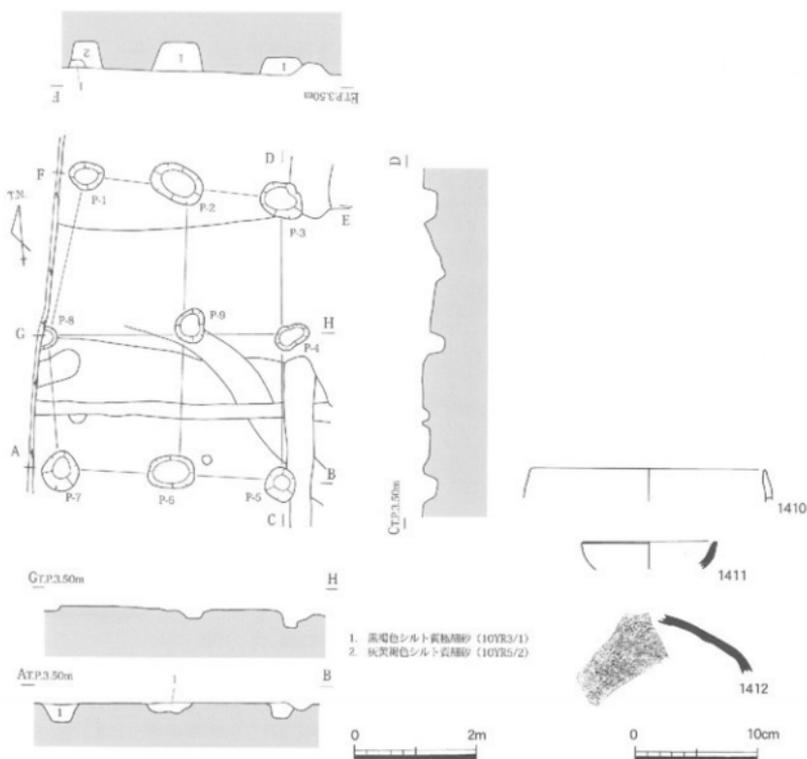
1410 は内傾する体部から短く直立する口縁部である。1411 は体部からそのまま口縁部にいたる。1412 は外面にカキ目が施される。

(2) 柱列

SA5001 (第184図)

調査区東側中央において検出した柱列であり、S B 5003 の北東側に位置する。検出した標高は 3.36 m である。検出した柱は 4本であり、全長は 4.85 m を測る。主軸方位は $N-75^{\circ}-W$ である。柱穴の平面形は円形・楕円形であり、直径は 0.43 ~ 0.62 m を測る。検出面からの深さは 0.14 ~ 0.50 m であり、P-1 が浅い。断面は逆台形を呈する。

遺物は、数点の土師器・須恵器小片のみである。



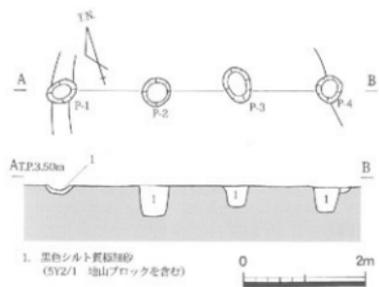
第 183 図 SB5006 平・断面図及び出土遺物実測図 (S : 1/80. 1/4)

(3) 溝

SD5001 (第 177・185 図)

調査区西側において検出した溝であり、S D 5002・5003・5005・5010, S B 5006 を切る。検出した標高は 3.20 m である。溝の方位は $N-7^{\circ}-E$ であり、直線的に延びる。溝の幅は 0.31~0.72 m, 検出面からの深さは 0.07~0.18 m を測る。断面は船底形を呈し、底面のレベルは中央でやや低くなるが、全体的には平坦である。埋土は 3 層である。

遺物は、土師器盤 (1413)、須恵器杯蓋 (1414・1415) である。1413 は底径が大きく、低い高台を持つ。1414 は口縁端部が短く屈曲し、1415 は口縁部内面に短い返りを持つ。



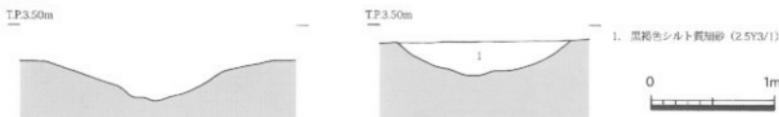
第 184 図 SA5001 平・断面図 (S : 1/80)



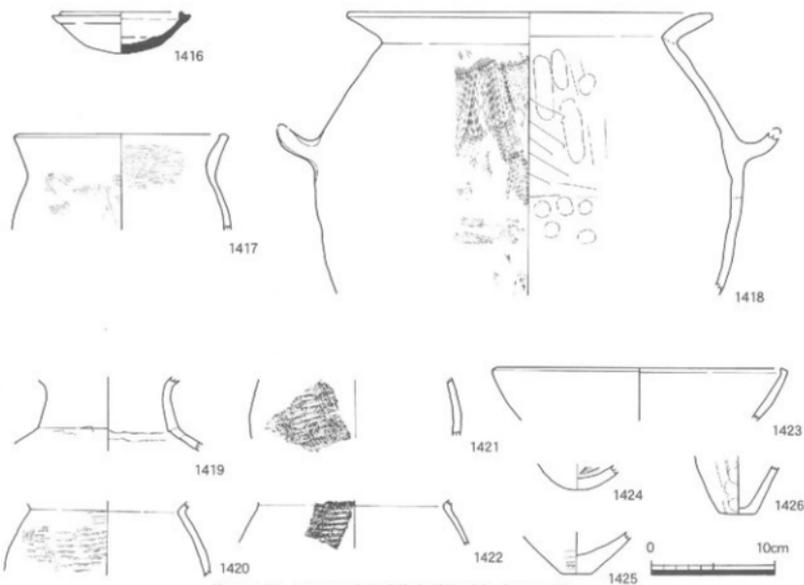
第 185 図 SD5001 断面図及び出土遺物実測図 (S : 1/40, 1/4)

SD5002 (第 177・186～188 図)

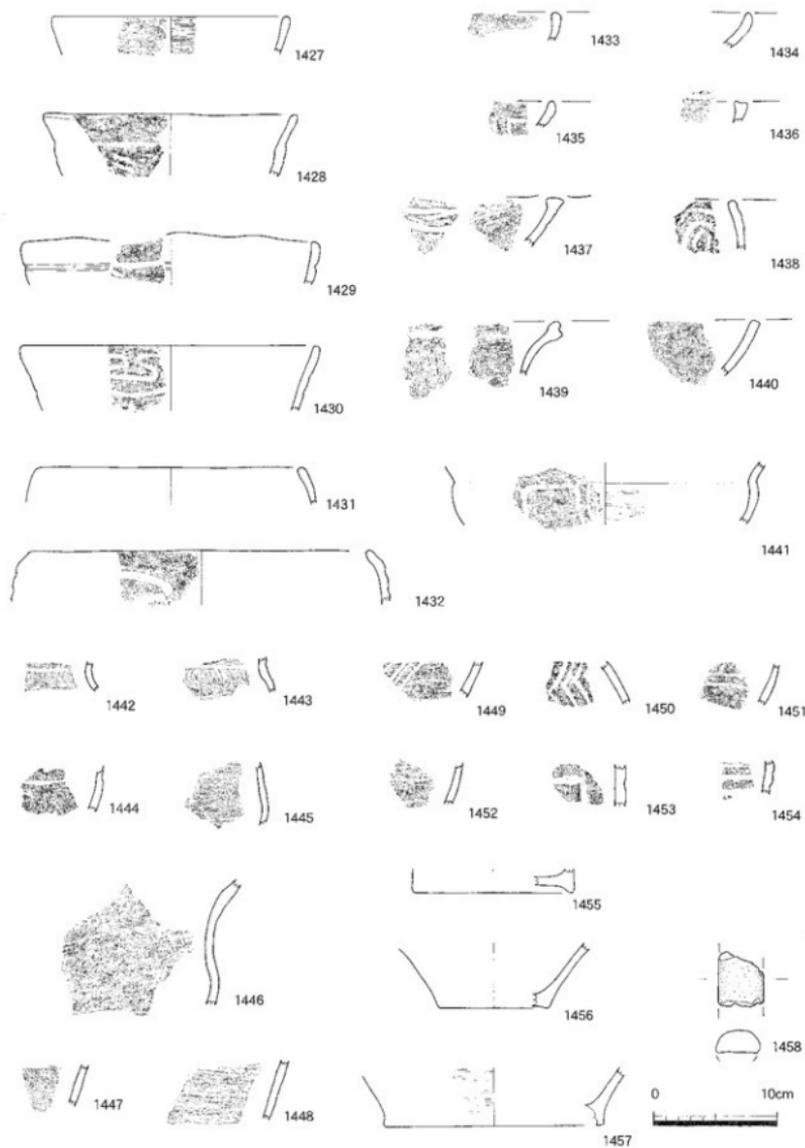
調査区南東隅から南西隅にかけて検出した溝であり、西端付近で S D 5003・5005 と合流し、S B 5003・5006、S D 5001 に切られる。検出した標高は 3.20～3.39 m である。溝西側の方位は N-90°-W を示し直線であるが、東側は僅かに湾曲する。東側に位置する 6 工区には本遺構と同様な溝を検出していないことより、本遺構は 5 工区と 6 工区の間で南北方向に屈曲すると考えられる。また、西側の 2 工区には本遺構の延長線上に S D 2001 が検出されるが、その出土遺物は近世陶磁器であり、年代が全く合わない。5 工区と 2 工区の間で南北方向に屈曲する可能性が考えられる。溝の幅は約 1.26～1.82 m を測り、西になるにしたがいが太くなる。深さは 0.30 m を測り、底面のレベルは東から西に比高差約 0.20 m で緩やかに低くなる。断面は船底形を呈する。埋土は黒褐色シルト質細砂の単一層である。



第 186 図 SD5002 断面図 (S : 1/40)



第 187 図 SD5002 出土遺物実測図 (1) (S : 1/4)



第 188 图 SD5002 出土物实测图 (2) (S : 1/4)

遺物は、須恵器杯身(1416)、土師器甕(1427・1418)、弥生土器壺(1419)、同甕(1420～1422・1424～1426)、同鉢(1423)、縄文土器浅鉢(1427～1429・1431～1445・1447～1454)、同深鉢(1430・1446)、同底部(1455～1457)、石棒(1458)である。

1416は口径が小さく、短い受部が口縁部内面に付く。外面はヘラケズリが施される。

1417は口縁部が体部から緩やかな傾斜で外反する。1418は体部に扁平な把手が付き、口縁部は鋭角に外反する。体部外面は細かいハケ、内面は指ナデ・指頭圧痕・ヘラナデが施される。

1419は頸部が内傾気味に直立し、内面に2ヶ所の接合痕が残る。1420～1422は体部外面に平行目のタタキが施され、1420はその後にハケが施される。

1423は口縁端部が上方に若干拡張する。1424は丸底気味の底部、1425・1426は平底で、1425は体部外面と底面に平行目のタタキが施される。

1429は波状口縁部で外面に太い沈線を巡らす。1431・1432・1438は内傾する口縁部で、1432・1438は外面に輪状の沈線が施される。1435は外面に縦と横の沈線が施される。1436は口縁端部が内側に拡張し、1437は口縁端部が拡張し外面に沈線が施される。1439は口縁端部が上方に拡張し外面にハケ、内面にヘラナデが施される。1441～1444・1449～1454は外面に沈線が施される。1430は外面に沈線が施され、1445～1448は外面にナデが施される。

SD5003 (第177・189図)

調査区南西側において検出した溝であり、北端はSD 5002と合流し、SD 5005に切られる。検出した標高は3.20 mである。溝の方向は南北方向であり、「く」の字状に屈曲する。溝の幅は約0.80～1.50 mを測り、北になるにしたがい太くなる。深さは0.24 mを測り、底面のレベルは南から北に僅かに低くなり、SD 5002の底面と合流する。断面は船底形を呈する。

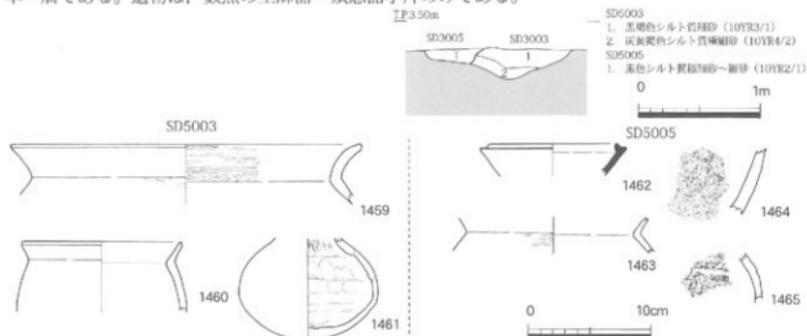
遺物は、土師器甕(1459・1460)、弥生土器壺(1461)である。

1459は大きく外反する口縁部で、口縁部内面に横方向のハケが施される。

1461は球形の体部で、内面上半に絞り目・指頭圧痕、下半にヘラケズリが施される。

SD5004 (第177図)

調査区南西側において検出した溝であり、北端はSD 5005と合流する。検出面のレベルは標高3.20 mである。溝の方向は南西-北東方向である。溝の幅は約0.90 m、深さは0.10 mを測り、底面のレベルはSD 5005の底面と同じである。断面は逆台形を呈する。埋土は黒色シルト質細砂～極細砂の単一層である。遺物は、数点の土師器・須恵器小片のみである。



第189図 SD5003・5005断面図及び出土遺物実測図 (S: 1/40, 1/4)

SD5005 (第 177・189 図)

調査区南西側において検出した溝であり、北端は S D 5002 に切れられ、南端付近で S D 5004 と合流する。検出した標高は 3.20 m である。溝の方位は N-42°-W である。溝の幅は約 0.50 m、深さは 0.10 m を測る。断面は逆台形を呈する。底面のレベルは平坦である。

遺物は、須恵器杯 (1462)、弥生土器甕 (1463・1464)、縄文土器浅鉢 (1465) である。

1462 は口縁部内面に短い受部が付く。

1463・1464 は体部外面に平行目のタタキが施される。1465 は外面に沈線が施される。

SD5006 (第 177・190 図)

調査区北東側において検出した溝であり、南端は S D 5002 と合流し、S A 5001 に切られる。検出した標高は 3.34 m である。溝の方位は N-8°-W である。溝の幅は 0.40~1.07 m を測り、北側になるにしたがい幅広くなる。深さは 0.08~0.14 m を測る。断面は逆台形を呈する。底面のレベルは南から北に緩やかに下がる。埋土は黒褐色シルト質極細砂である。

遺物は、土師質土器鍋 (1466) である。

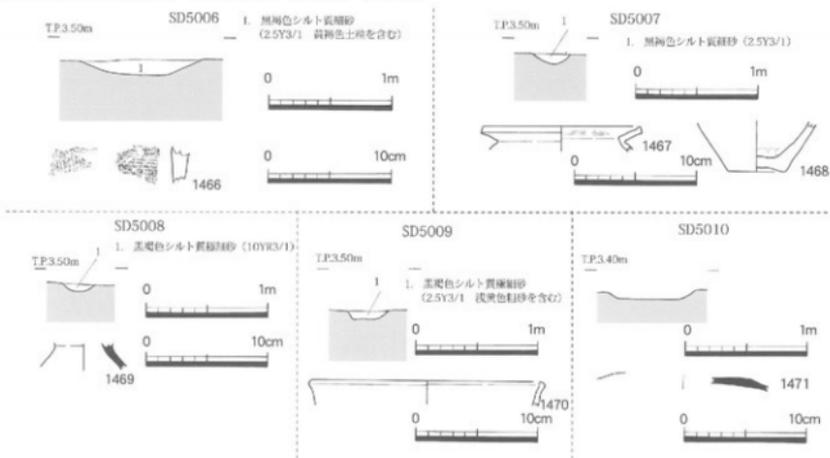
SD5007 (第 177・190 図)

調査区東側において検出した溝であり、S D 5002・5006、S A 5001 に切られる。検出した標高は 3.35 m である。S D 5002 より北流する本溝は、S A 5001 の北側で直角に曲がって東方向に延びる。南北方向の溝の方位は N-10°-E である。溝の幅は 0.30 m、検出面からの深さは 0.05 m を測る。断面は船底形を呈する。底面は平坦である。

図化した遺物は、弥生土器甕 (1467・1468) であるが、その他は数点の土師器小片である。

SD5008 (第 177・190 図)

調査区南西側から南東側において検出した溝であり、S D 5001・5003・S K 5001 に切れられ、S D 5005 を切る。検出した標高は 3.17~3.50 m である。溝の方位は N-85°-W である。溝の幅は 0.10~0.25 m、深さは 0.06 m を測る。断面は船底形を呈する。底面のレベルは東から西に緩やかに下がる。遺物は、須恵器高杯 (1469) である。



第 190 図 SD5006~5010 断面図及び出土遺物実測図 (S: 1/40, 1/4)

SD5009 (第 177・190 図)

調査区北西隅において検出した溝である。検出した標高は 3.17 m である。溝の方位は N-75°-W である。溝の幅は 0.37 m、深さは 0.08 m を測る。断面は逆台形を呈する。底面のレベルは東から西に緩やかに下がる。埋土は黒褐色シルト質極細砂である。

遺物は、上師器杯 (1470) であり、口縁端部内面に沈線状の凹みを巡らす。

SD5010 (第 177・190 図)

調査区北西側において検出した溝であり、SD 5001 に切られる。検出した標高は 3.20 m である。溝の方位は N-85°-W である。溝の幅は 0.36 ~ 0.70 m、深さは 0.06 m を測る。断面は逆台形を呈する。底面のレベルは平坦である。埋土は黒褐色シルト質極細砂である。

遺物は、須恵器杯蓋 (1471) であり、天井部外面に回転ヘラキリ後にナデが施される。

(4) 上坑

SK5002 (第 177・191 図)

調査区南西隅において検出した土坑である。検出した標高は 3.20 m である。平面形は不整な楕円形を呈し、南西側は調査区外にかかる。検出した規模は東西方向 2.20 m、南北方向 1.08 m、検出面からの深さ 0.10 m を測る。

遺物は、土師器杯 (1472) である。



第 191 図 SK5002 出土遺物実測図
(S : 1/4)

SK5003 (第 192 図)

調査区中央南端において検出した土坑であり、SD 5003 に切られる。検出した標高は 3.30 m である。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は南北方向の長軸 1.90 m 以上、東西方向の短軸 0.82 m、検出面からの深さ 0.20 m を測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は、須恵器杯 (1473)、管状土錘 (1474) である。

SK5004 (第 192 図)

調査区中央南端において検出した土坑である。検出した標高は 3.35 m である。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は南北方向の長軸 1.57 m、東西方向の短軸 0.92 m、検出面からの深さ 0.13 m を測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は、数点の上師器・須恵器小片のみである。

SK5005 (第 192 図)

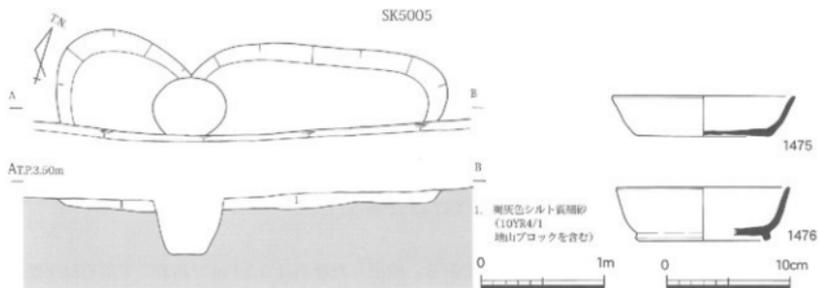
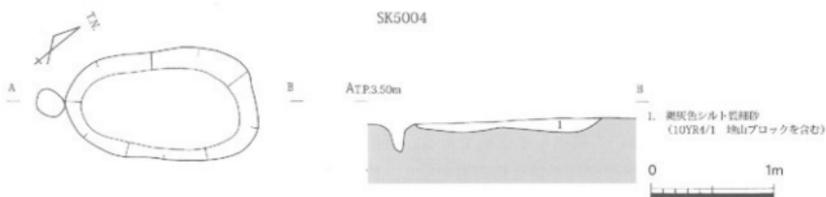
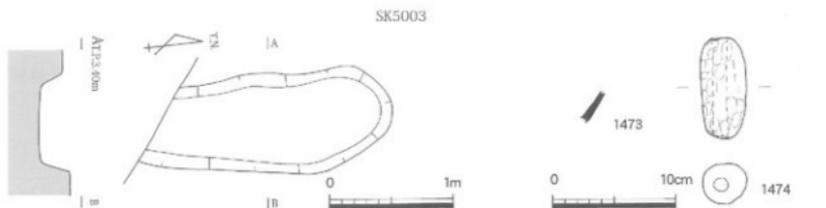
調査区中央南端において検出した上坑であり、SB 5004 に切られる。検出した標高は 3.40 m である。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は東西方向の長軸 3.15 m、南北方向の短軸 0.72 m 以上、検出面からの深さ 0.12 m を測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は、須恵器杯 (1475・1476) である。

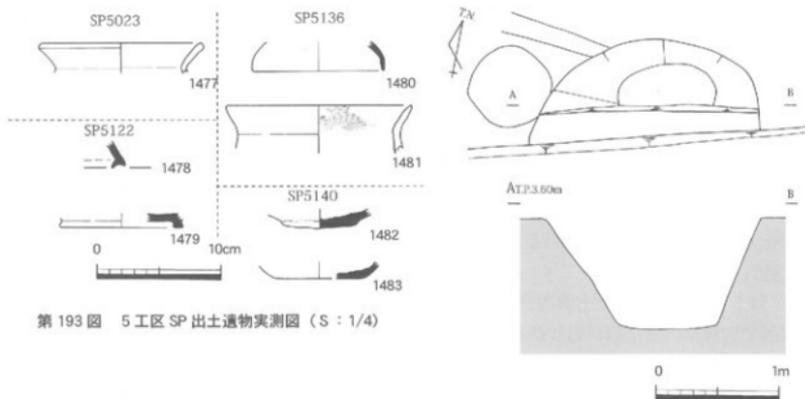
1475 は底面に回転ヘラキリ後にナデが施され、1476 は高台を有し、底面に回転ヘラケズリ、内面に回転ナデ後にヘラナデが施される。

(5) 柱穴 (第 193 図)

1477 は S P 5023 出上の上師器甕である。1478・1479 は S P 5122 出土であり、1478 は須恵器杯蓋で口縁部内面に短い返りがあり、1479 は須恵器杯で底面に回転ヘラケズリが施される。1480・1481 は S P 5136 出土であり、1480 は須恵器杯蓋で外面に僅かな稜を有し、1481 は上師器甕で口縁部内面に横方向のハゲが施される。1482・1483 は S P 5140 出土の須恵器杯であり、1482 の底部外面はヘラケズリ・ナデ、1483 の底部外面はナデが施される。



第 192 図 SK5003 ~ 5005 平・断面図及び出土遺物実測図 (S : 1/40, 1/4)



第 193 図 5 工区 SP 出土遺物実測図 (S : 1/4)

第 194 図 SK5001 平・断面図 (S : 1/40)

2 江戸時代

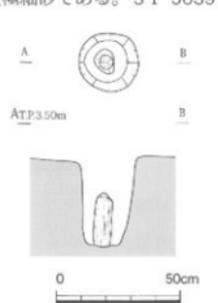
(1) 土坑

SK5001 (第194図)

調査区南東端において検出した土坑である。検出した標高は3.48 mである。平面形は不整な円形を呈し、規模は東西方向の直径1.88 m、深さ0.92 mを測る。断面は逆台形を呈する。

(2) 柱穴 (第195・196図)

調査区中央において検出した柱穴群である。検出した標高は3.20～3.37 mである。平面形は円形であり、直径は0.20～0.42 m、深さは0.15～0.35 mを測る。埋土は全く締まりのない灰白色シルト質極細砂である。S P 5039は柱材が残存する。



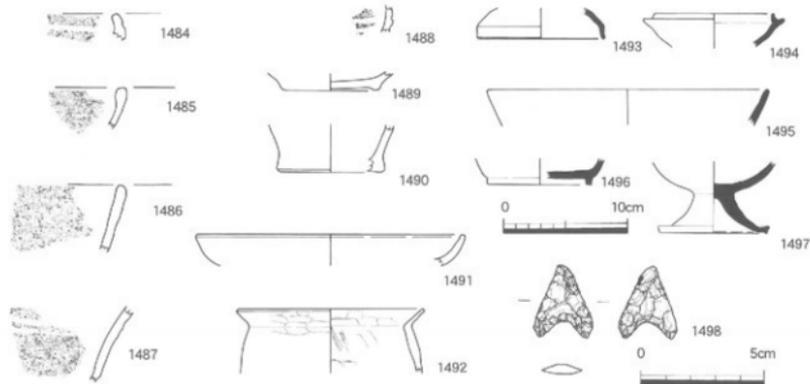
第195図 SP5039 平・断面図
(S : 1/20)



第196図 5工区 SP 平面図 (S : 1/200)

3 5工区包含層出土遺物 (第197図)

1484・1485・1488は縄文土器浅鉢, 1486・1487は縄文土器深鉢, 1489・1490は縄文土器底部である。1491は土師器皿, 1492は土師器甕である。1493は須恵器杯蓋, 1494は須恵器杯身, 1495・1496は須恵器杯, 1497は須恵器高杯, 1498は石罫である。

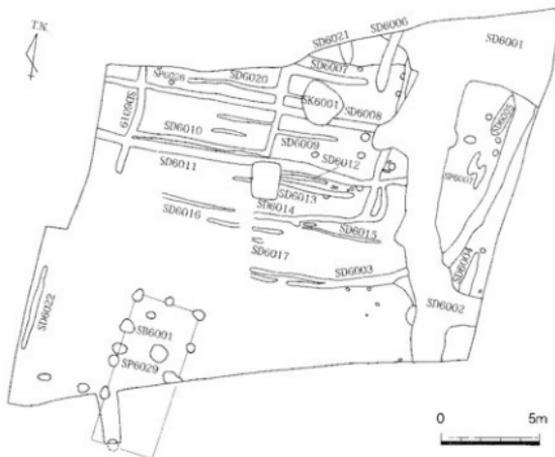


第197図 5工区包含層出土遺物実測図 (S : 1/4, 1/2)

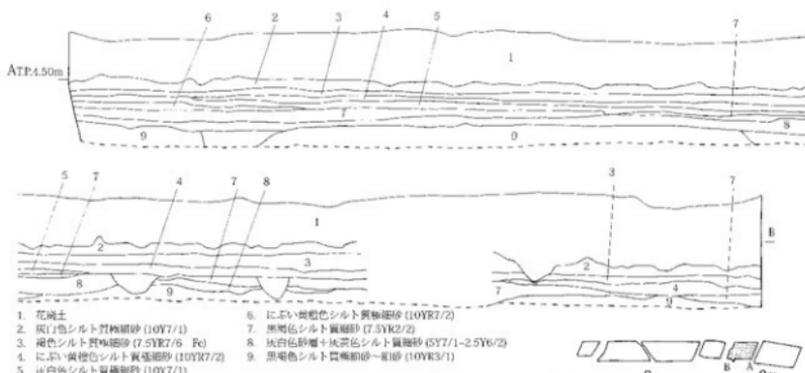
6.6 工区

6 T区は、5 T区と3 工区の間位置する。東西方向の全長は約 24.50 m、南北は約 20.00 mである。調査区中央の南北軸座標値は X = 146.790、東西軸座標値は Y = 55.830 である。

遺構面は 1 面であり、現地表面からの深さは約 1.60 m である。遺構面のレベルは標高 3.40 ~ 3.80 m であり、南東から北西に緩やかに下がる。最上位に厚さ約 0.90 m の花崗土、その下に 4 枚の近世条里型水口、2 層の中世以前の堆積土層、黒褐色シルト質極細砂～細砂の遺構面となる。



第 198 図 6 工区遺構配置図 (S : 1/250)



第 199 図 6 工区南壁土層図 (S : 1/80)

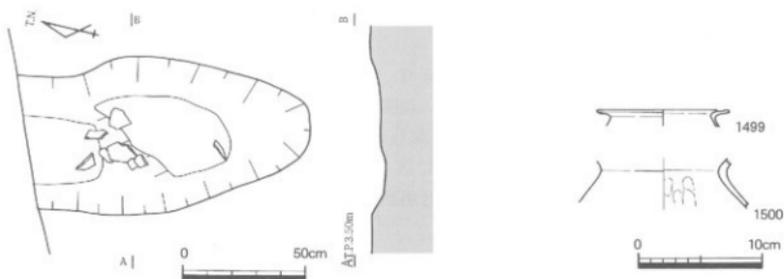
1 弥生時代

(1) 溝

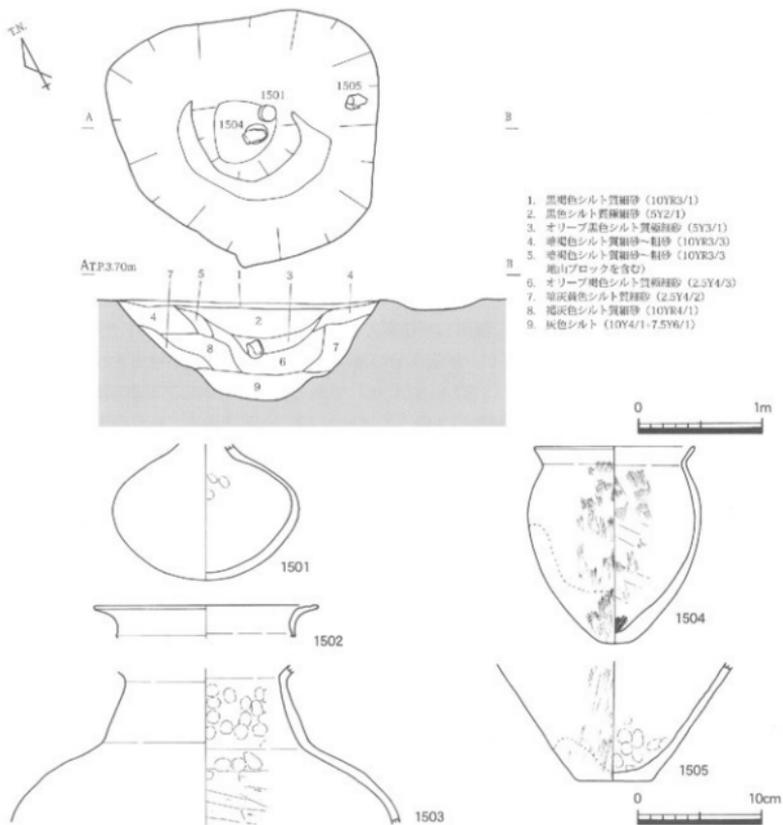
SD6021 (第 200 図)

調査区中央北端において検出した溝であり、北側の調査区外に延びる。検出した範囲は非常に狭いため本遺構の性格は不明であるが、本報告書では溝とする。検出した標高は 3.40 m である。溝の方位は N - 20° - W である。溝の幅は 0.55 m、深さは 0.26 m を測り、断面は逆台形を呈する。底面のレベルは南から北に下がり、南端では一段浅くなる部分がある。埋土は黒褐色シルト質極細砂である。溝の底面直上から土器が集中して出土する。

遺物は、弥生土器甕 (1499・1500) である。1499 の口縁部はほぼ水平に広がる。



第 200 図 SD6021 平・断面図及び出土遺物実測図 (S : 1/20, 1/4)



1. 黒褐色シルト質細砂 (10YR3/1)
2. 黒色シルト質細砂 (5Y2/1)
3. オリーブ褐色シルト質細砂 (5Y3/1)
4. 赤褐色シルト質細砂~粗砂 (10YR3/3)
5. 赤褐色シルト質細砂~粗砂 (10YR3/3) 地(フロックを含む)
6. オリーブ褐色シルト質細砂 (2.5Y4/3)
7. 黄灰褐色シルト質細砂 (2.5Y4/2)
8. 褐灰色シルト質細砂 (10YR4/1)
9. 灰色シルト (10Y4/1-7.5Y6/1)

第 201 図 SK6001 平・断面図及び出土遺物実測図 (S : 1/40, 1/4)

(2) 土坑

SK6001 (第201図)

調査区中央北側において検出した土坑であり、S D 6008 に切られる。検出した標高は3.50 mである。平面形は南西隅が丸い隅丸方形を呈し、規模は東西方向の長さ2.20 m、南北方向の長さ2.04 m、検出面からの深さ0.80 mを測る。断面は船底形を呈し、南側の掘り方には段を有する。埋土は9層に分けられる。本遺構の埋没過程は、最初に第9層がテラス付近まで埋まり、次に第4～8層が随時堆積し、最終段階で中央の凹地に第1～3層が堆積する。第3層中より弥生土器(1501・1504・1505)が出土している。

遺物は、弥生土器壺(1501～1503)、同壺(1504・1505)である。

1501は長頸壺であり、体部は丸くなった算盤珠状である。内面は指頭圧痕・ナデが施される。1502は二重口縁壺であり、口縁端部がほぼ水平方向に広がり、内面に浅い沈線が3条巡る。1503は広口壺であり、肩の張る球形の体部の肩部から内傾して伸びる頸部である。頸部内面は指頭圧痕後にナデ、体部内面は横方向のヘラケズリが施される。

1504は小さくやや丸みを持つ底部で、やや肩の張る体部から口縁部が外反する。体部外面はハケ後にナデ、内面はハケ後にヘラナデが施される。1505は平底の底部であり、外面に縦方向のヘラミガキ、内面に指頭圧痕が施される。

2 古代

(1) 掘立柱建物跡

SB6001 (第202図)

調査区南西側において検出した掘立柱建物跡であり、本建物が南側の調査区外に広がるため調査区を2.50×1.00 mの範囲で拡張する。検出した標高は3.72～3.79 mである。検出した規模は東西2間、南北3間(3.80×5.93 m)であるが、拡張部分の南端に南列側柱の柱穴が検出されたことより、本建物の規模は東西2間、南北4間(3.80×8.00 m)である。東西方向の芯芯間距離は1.65 m、南北の芯芯間距離は1.70 mを測る。建物の主軸方位はN-12°-Eである。柱穴の平面形は不整な凹形・楕円形を呈し、直径は0.45～0.75 mを測る。深さは0.15～0.32 mを測る。断面は逆台形を呈し、P-1・3は底面に僅かな段を有する。埋土は4層であり、断面に柱痕は検出されない。

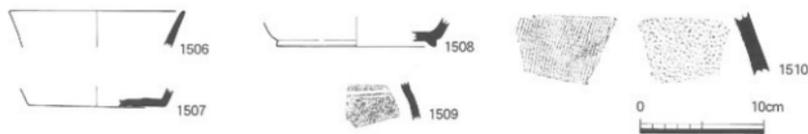
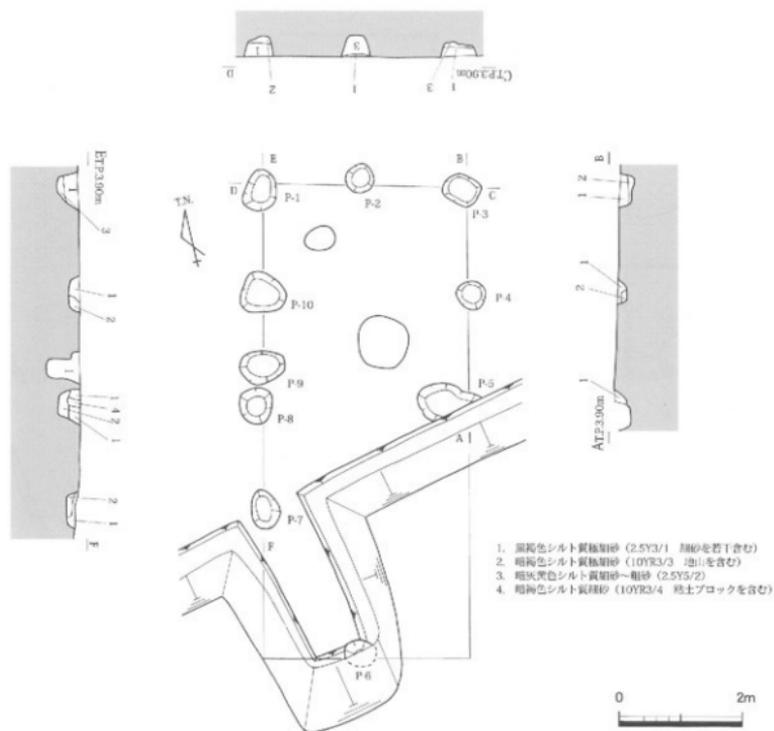
遺物は、須恵器杯(1506～1508)、同壺(1509・1510)である。

1506は直線的な体部から口縁部にいたる。1507は底面に切り離し後に板ナデが施される。1508は細い高台を有する。1509は外面にカキ日が施され、内面に当て具痕が残される。1510は外面に格子目のタタキが施され、内面に当て具痕が残される。

(2) 溝

SD6001 (第161・198・203図)

調査区北東端において検出した溝であり、東に隣接する3丁区のS D 3008 と同一の溝である。第161図で示すように、本溝・S D 6002 とS D 3008・3021は合流し方形に区画する。6工区での検出した標高は3.54 mである。検出できたのは溝の南側の掘り込みと底面の一部である。検出できた溝の幅は4.80 m、深さは0.40 mを測る。S D 3008の西端での規模と比較すると幅は広くなり、さらに3丁区での底面の標高が3.20 mに対し6工区は3.10 mであり、本溝はS D 3008より規模が大きくなる。埋土はS D 3008と同様である。



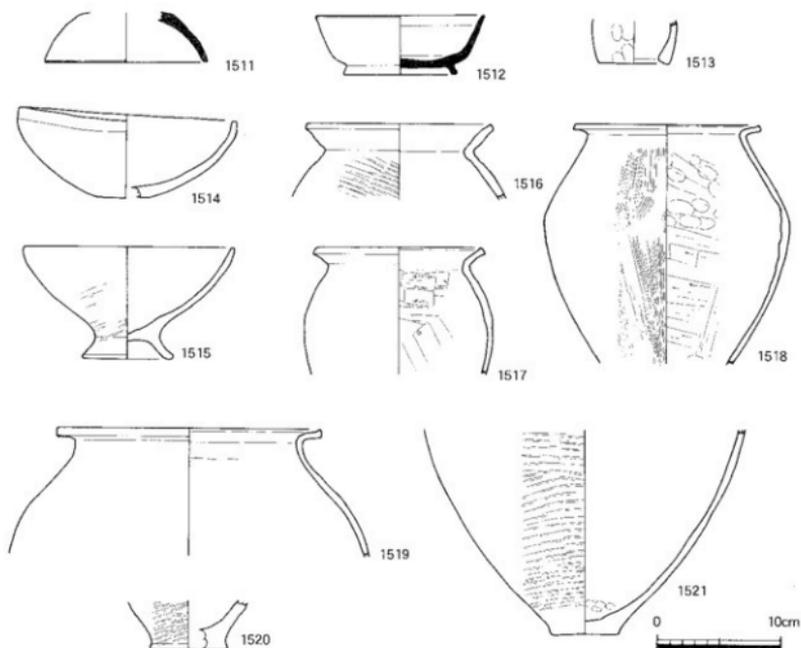
第202図 SB6001平・断面図及び出土遺物実測図 (S : 1/80. 1/4)

遺物は、須恵器杯蓋 (1511)、同杯 (1512)、飯蛸壺 (1513)、弥生土器鉢 (1514・1515)、同甕 (1516～1521) である。

1511は器高の高い蓋で、1512はやや高い高台を有し、体部は直線的に延び口縁部にいたる。

1514は半球状の体部から口縁部が直立し、底部は平底である。1515は器高の深い体部に高台が付く。体部外面はタタキ、内面はナデが施される。

1516・1517は球形の体部から鋭角に外反する口縁部で、1516の体部外面は平行タタキ、1517の体部内面は横方向と斜め方向のヘラケズリが施される。1518・1519は肩の若干張る体部からほぼ水平方向に広がる口縁部であり、口縁端部は僅かに上方に拡張する。1518は体部外面上半に縦方向



第 203 図 SD6001 出土遺物実測図 (S : 1/4)

のハケ、下半に細かいヘラミガキ、内面上半に指頭圧痕の後にヘラナデ、下半にヘラケズリが施される。1520・1521 は平底の底部で、体部外面に平行タタキ、内面下位に指頭圧痕が残る。

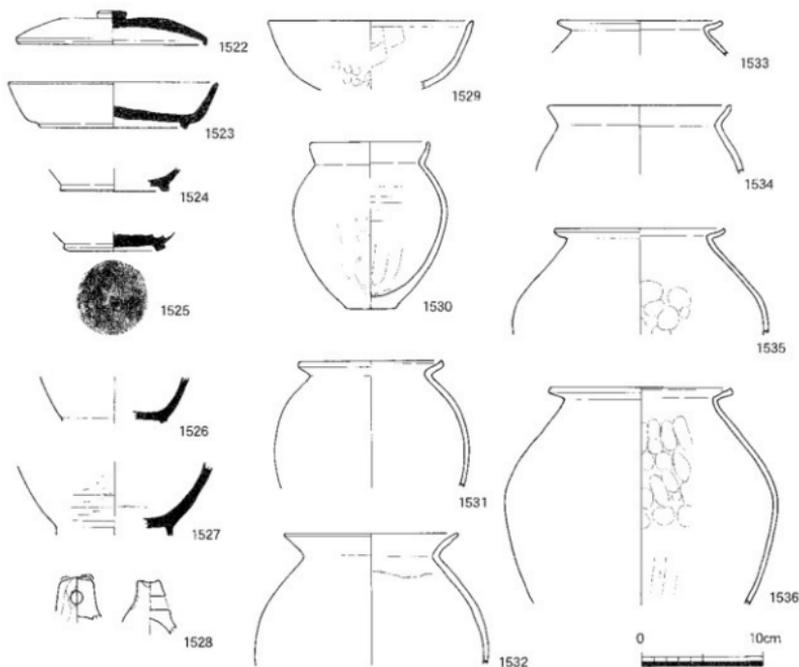
SD6002 (第 161・198・204・205 図)

調査区東側において検出した溝であり、北端で S D 6001 と合流する。本溝の南端では、そのまま南方に延びる溝と直角に屈曲し東方に延びる溝に分岐する。東に延びる溝は東隣する 3 上区の S D 3021 に繋がる。第 161 図で示すように、本溝・S D 6001 と S D 3008・3021 は合流し方形に区画する。検出した標高は 3.45～3.80 m である。溝の方位は N-5°-W である。溝の幅は 1.50～2.50 m、深さは 0.50 m を測り、溝の規模は南から北になるにしたがい大きくなる。断面は逆台形を呈し、底面のレベルは南から北に緩やかに下がる。S D 3021 の西端での底面のレベルは標高 3.74 m であり、本溝の東端では 3.46 m である。埋上は上層から黒褐色シルト質極細砂・浅黄橙色粗砂・褐灰色シルト質細砂+浅黄橙色粗砂の 3 層である。

遺物は、須恵器杯蓋(1522)、同杯(1523～1526)、同壺(1527)、飯蛸壺(1528)、弥生土器鉢(1529)、同甕(1530～1545)である。

1522 は扁平な宝珠形摘みを有する器高の低い蓋であり、口縁端部は短く下方に屈曲する。外面は回転ナデ、天井部内面は回転ナデ後に部分的なヘラナデが施される。

1523～1526 は低い高台を有し、1523 の底面は切り離し後にヘラナデ、1525 の底面中央には「×」



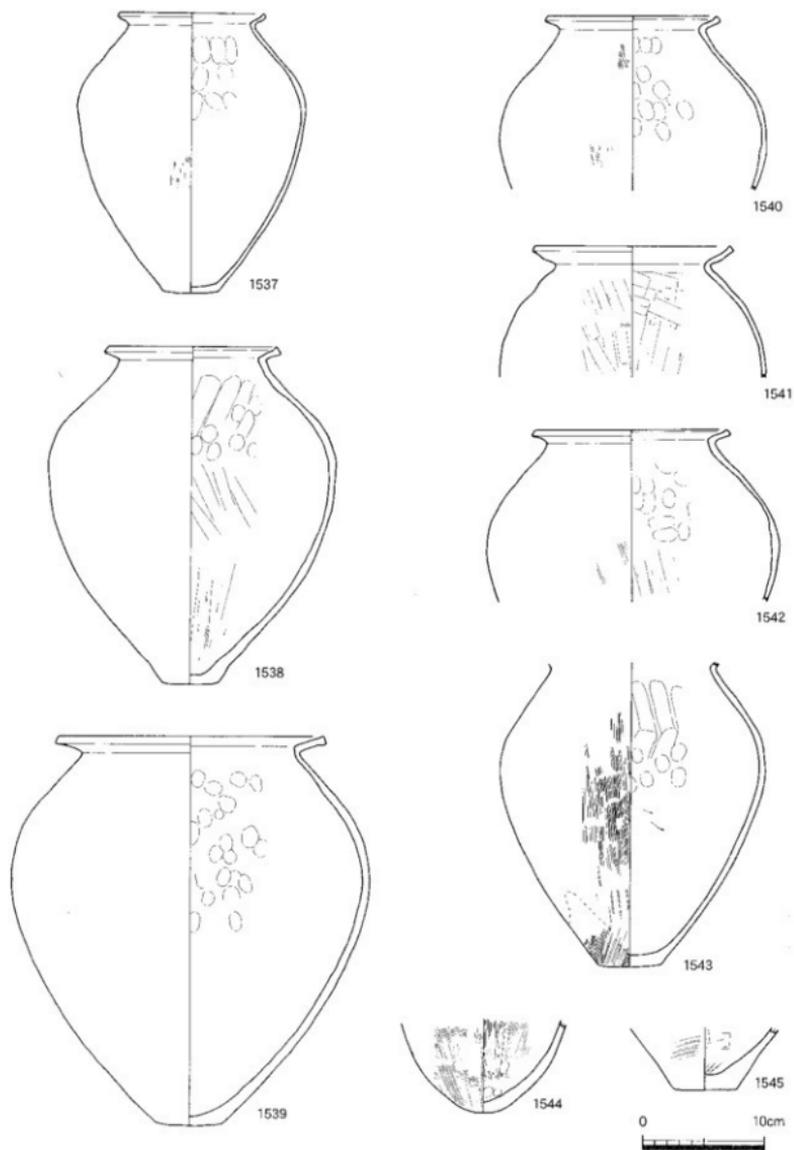
第 204 図 SD6002 出土遺物実測図 (1) (S : 1/4)

のヘラ記号がある。1526 は若干内湾気味の体部である。

1529 は半球状の体部であり、体部外面下半に指頭圧痕・ナデ、内面にナデ・ヘラナデが施される。1530 は小形の甕であり、底部は平底で、球形の体部から外反する口縁部は受け口状である。体部外面下半はハケ後に板ナデ、内面は横と縦方向のナデが施される。1531～1543 は肩の若干張る体部から鋭角に屈曲する口縁部であり、1532・1534 を除いて口縁端部が若干上方に拡張する。1535・1536・1539 は体部内面上半に指頭圧痕、1537・1540・1542 は体部内面上半に指頭圧痕、外面にハケ・ヘラミガキが施される。1538・1543 は体部内面上半に指ナデ・指頭圧痕、下半にヘラケズリが施され、1543 の外面上半にハケ、下半にヘラミガキが施される。1541 は体部内面にヘラケズリ、外面にハケ・板ナデが施される。1544 は丸みのある平底で、内外面にハケが施される。1545 は明確な平底であり、体部外面に平行目のタタキ、内面にヘラケズリ、底面には 1 方向のヘラミガキが施される。

SD6003 (第 198・206 図)

調査区東側において検出した溝であり、SD 6001・6002 に切られる。検出した標高は 3.60～3.70 m である。東端中央では溝が南北方向に延びるが、SD 6002 を境に西方に屈曲する。南北方向の溝は N-18°-E である。溝の幅は 0.38～1.20 m、深さは 0.07～0.16 m を測る。断面は船底形を呈する。底面のレベルは平坦である。埋土は黒褐色シルト質細砂の単一層である。



第205図 SD6002 出土遺物実測図(2)(S:1/4)

遺物は、土師器杯 (1546)、須恵器椀 (1547)、同杯 (1548・1549)、土師質土器鍋 (1550)、飯蛸壺 (1551・1552) である。

SD6004 (第 198・207 図)

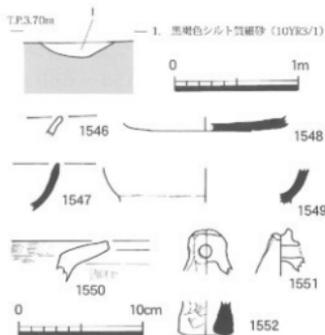
調査区南東側において検出した溝であり、S D 6002 に切られる。検出した標高は 3.70 m である。溝の方位は N-10°-E である。溝の幅は 0.25~0.60 m、深さは 0.06 m を測る。断面は逆台形を呈する。底面のレベルは平坦である。埋土は黒褐色シルト質細砂である。

遺物は、須恵器杯蓋 (1553) である。

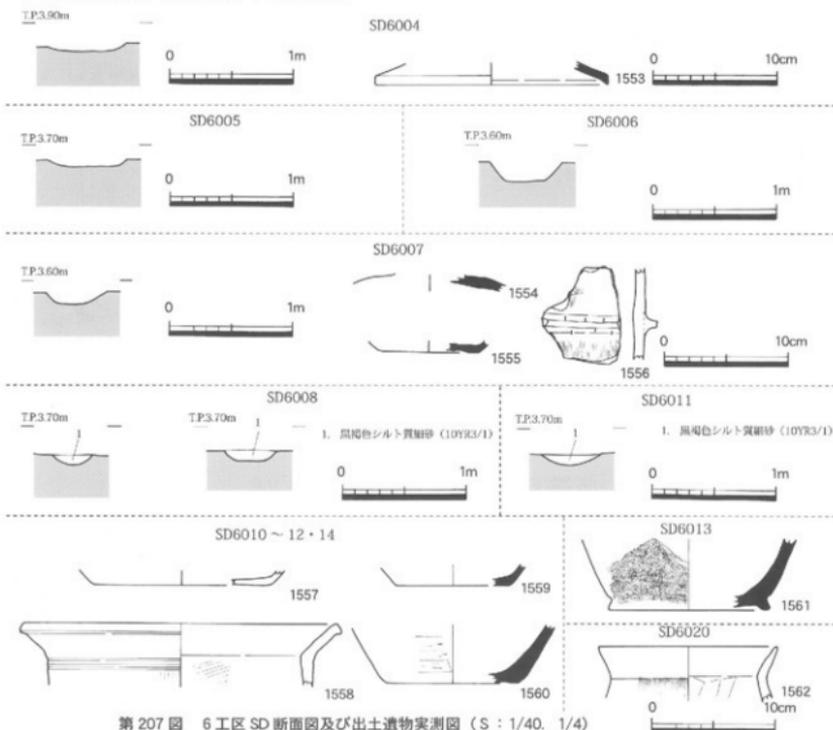
SD6005 (第 198・207 図)

調査区北東側において検出した溝であり、S D 6003 に切られる。検出した標高は 3.57 m である。溝の方位は N-23°-E である。溝の幅は 0.64 m、深さは 0.04 m を測る。断面は逆台形を呈する。底面のレベルは平坦である。埋土は黒褐色シルト質細砂である。

遺物は、数点の土師器小片のみである。



第 206 図 SD6003 断面図及び出土遺物実測図 (S : 1/40, 1/4)



第 207 図 6 工区 SD 断面図及び出土遺物実測図 (S : 1/40, 1/4)

SD6006 (第198・207図)

調査区中央北端において検出した溝である。検出した標高は3.46 mである。溝の方位はN-10°-Eである。溝の幅は0.50~0.60 m、深さは0.15 mを測る。断面は逆台形を呈する。底面のレベルは平坦である。埋土は黒褐色シルト質細砂である。

遺物は、数点の土師器小片のみである。

SD6007~6017・6019・6020 (第198・207図)

調査区中央北側~北西隅において検出した南北方向と東西方向に延びる溝群である。検出した標高は3.48~3.55 mである。東西の溝の方位はN-88°-Wである。南北方向に延びるSD6010・6014・6020と東西方向で規模の大きなSD6008・6011は幅0.30~0.52 m、深さは0.07 mを測る。断面は逆台形を呈する。底面のレベルは南から北、東から西に向かって緩やかに下がる。埋土は黒褐色シルト質細砂である。

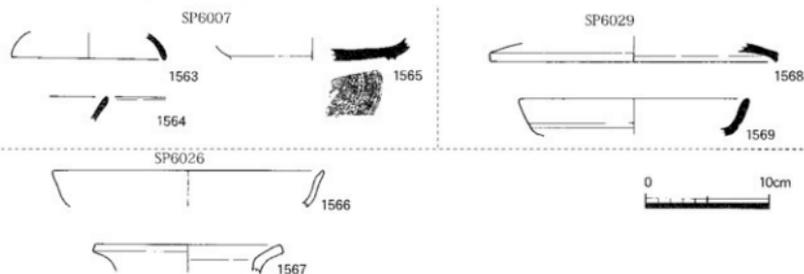
SD6007は須恵器杯蓋(1554)、同杯(1555)、土師器甕(1556)、SD6010~6012・6014は土師器杯(1557)、同甕(1558)、須恵器杯(1559)、同甕(1560)、SD6013は須恵器壺(1561)、SD6020は土師器甕(1562)が出土した。

SD6022 (第198図)

調査区南西隅において検出した溝である。検出した標高は3.70 m、方位はN-8°-Eである。溝の幅は0.34 m、深さは0.05 mを測る。埋土は黒褐色シルト質細砂である。遺物はない。

(3) 柱穴 (第208図)

1563~1565はSP6007出土であり、1563は須恵器杯蓋、1564・1565は同杯であり、1565の底面は回転ヘラケズリが施される。1566・1567はSP6026出土であり、1566は土師器杯で口縁端部内面に沈線状の凹みを持ち、1567は同甕である。1568・1569はSP6029出土であり、1568は須恵器杯蓋、1569は同杯である。



第208図 6工区SP出土遺物実測図(S:1/4)

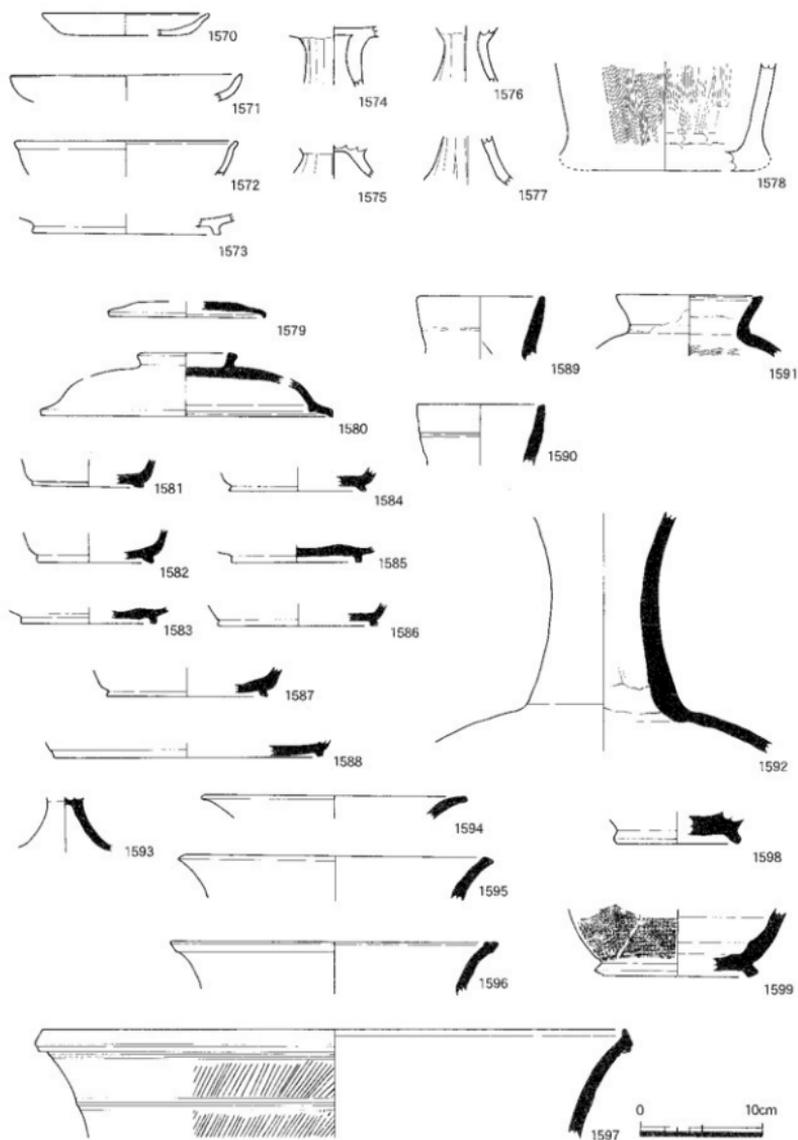
3 6 T区包含層出土遺物 (第209・210図)

1570・1571・1573は土師器皿、1572は同杯、1574~1577は同高杯、1578は同甕である。1572は屈曲する口縁端部内面に沈線状の凹みを持つ。1574~1577は外面を面取りする。

1579は須恵器杯蓋、1580は須恵器蓋、1581~1587は同杯、1588は同皿、1589・1590は同平瓶、1591・1592は同壺、1593は同高杯、1594~1599は同甕である。

1600は緑釉陶器碗、1601は灰釉陶器壺、1602は弥生土器鉢である

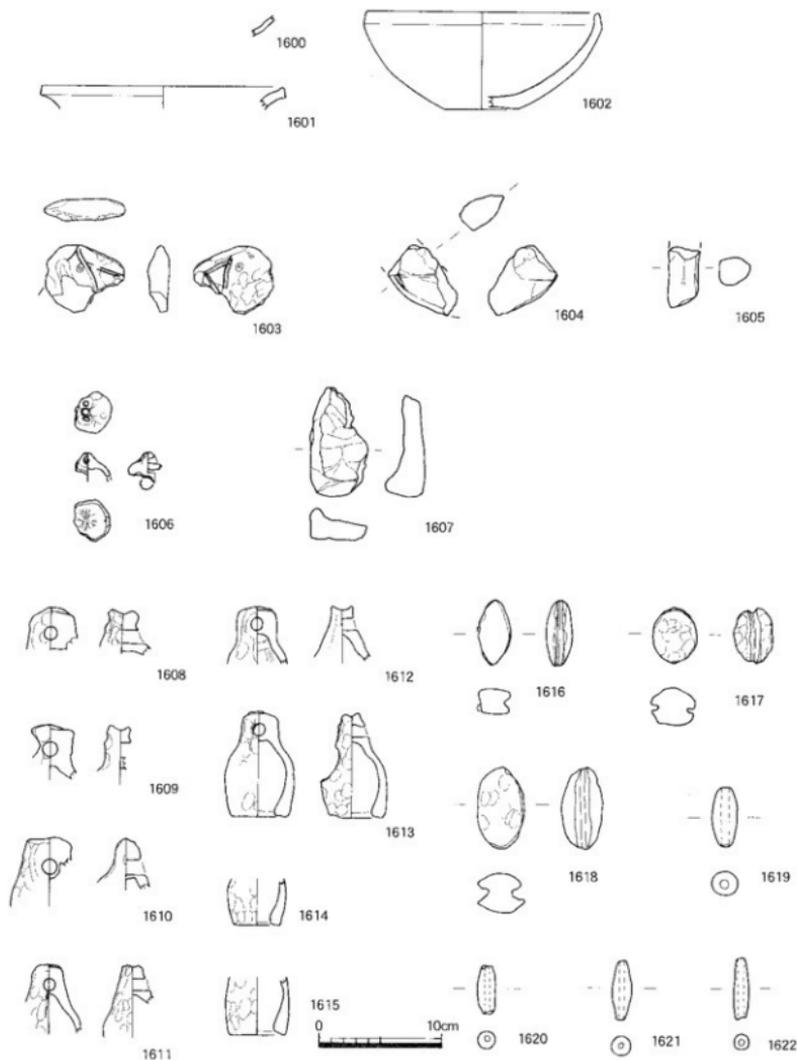
1603~1605は土馬であり、1603は目と面繋を描かれる頭部であり、1604は手綱が描かれる首部であり、上方は鬣を表現している。1605は足である。



第 209 图 6 工区包含层出土文物实测图 (1) (S : 1/4)

1606 は上鈴の上部であり、頂部に半環状の紐を付け、鈴の中央に孔を持つ。1607 は性格不明土製品で、中央は凹んでいる。

1608 ～ 1615 は飯蛸壺である。1616 ～ 1618 は有溝十鍾，1619 ～ 1622 は管状十鍾である。



第 210 図 6 工区包含層出土遺物実測図 (2) (S : 1/4)

第4章 まとめ

第1節 遺構の変遷

新田本村遺跡では掘立柱建物跡 28 棟、溝 147 条、井戸 5 基、土坑 87 基、柱列 2 列、柱穴多数、性格不明遺構 2 基、犁跡 3 面を検出した。これらの遺構は、遺構の切り合い関係や出土遺物から概ね 9 時期に分けることができる。ここでは、時期別に遺構相互の関係を確認し、新田本村遺跡の変遷を明らかにしたい。

縄文時代後期（第 211 図 ①）

この時期と認められる遺構は検出されていないが、東端の 3 工区 S D 3002 と 5 工区 S D 5002 と包含層より縄文土器が出土している。出土した地点は丘陵に近い部分に当たる。小山・南谷遺跡においても遺構は検出されずに縄文土器が溝から出土するのみであり、当該期の遺構はもっと東側の丘陵上に存在すると考えられる。

弥生時代後期（第 211 図 ②）

検出された遺構は非常に少なく、2 工区 S D 2016 と 6 工区 S D 6021、S K 6001 のみである。S D 2016 の時期は出土遺物から考えて後期中葉、S D 6021 と S K 6001 は後期後葉である。弥生時代の遺構は非常に希薄であり、弥生土器の出土も少数であることから、この地域における弥生時代の集落は大空遺跡や奥の坊遺跡等をはじめとして丘陵部に存在すると考えられる。

3 工区 S D 3008 と 6 工区 S D 6001・6002 では完形に近い弥生土器が多数出土するが、共存する遺物に 8 世紀の須恵器があり、これらの遺構は古代に属する。

古代Ⅰ期（7世紀 第 211 図 ③）

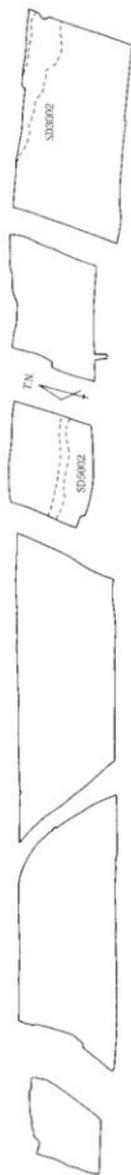
検出された遺構は掘立柱建物跡 4 棟、溝 27 条、性格不明遺構 1 基、土坑、柱穴であり、調査区全域にはほぼ均等に見られる。1 工区には S B 1003、S D 1001・1005・1009・1012～1014・1018・1021、S X 1001、2 工区には S D 2014・2015・2018～2020・2026、3 工区には S B 3002、S D 3008・3021、4 工区には S D 4001、5 工区には S B 5003・5004、S D 5001～5008、6 工区には S D 6001・6002 が検出される。この遺構の中で S B 3002・5003、S D 1009・1012～1014・1018・1021・2014・2015・3008・3021・4001・5001・6001・6002 は 8 世紀前半まで継続しており、S D 4001 は 9 世紀まで継続する。

掘立柱建物跡の S B 1003・5003 は総柱の建物であり、主軸は N-5°-E を示す。S B 5003 は S D 5002 より後出する遺構である。S B 3002 は S D 3008・3021・6002 により方形に区画された範囲内に建てられている。溝の方向は、掘立柱建物跡と同様に N-5°-E を示すものが多いが、S D 1005・1009 のように方向の異なる溝もある。S D 1014 は S B 1003 の南側で直角に屈曲しており、S B 1003 が S D 1014 を規制したと思われる。

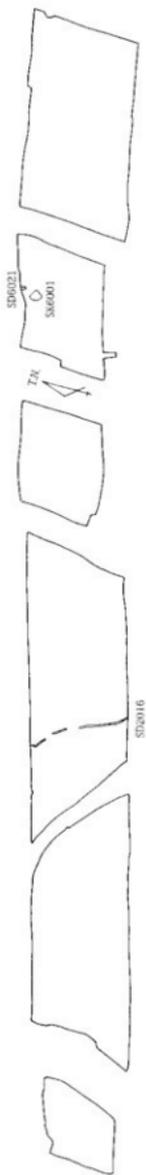
古代Ⅱ期（8世紀 第 212 図 ④）

本遺跡において当該期の遺構が最も多く検出されており、本遺跡の中心的位置を占める。前期より継続する遺構を除いた当該期の遺構は、掘立柱建物跡 21 棟、溝 57 条、井戸 2 基、土坑、柱穴多数であり、調査区全域にわたって検出されている。1 工区には S B 1001・1002・1004～1009、S D 1002・1004・1007・1006・1016・1017・1019・1020・1022・1024、S E 1002・1003、2 工区には S B 2001～2004・2008～2011、S D 2021・2024・2038・2042、S P 2163、3 工区には S B 3001、S D 3001～3007・3009～3023、4 工区には S D 4002～4004、5 工区には S B 5001・5002・5006、S D 5009、6 工区には S B 6001、S D 6003～6020 がある。こ

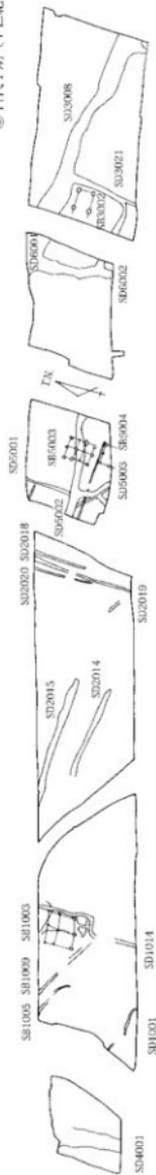
① 繩文時代後期



② 弥生時代後期



③ 古代1期 (7世紀)

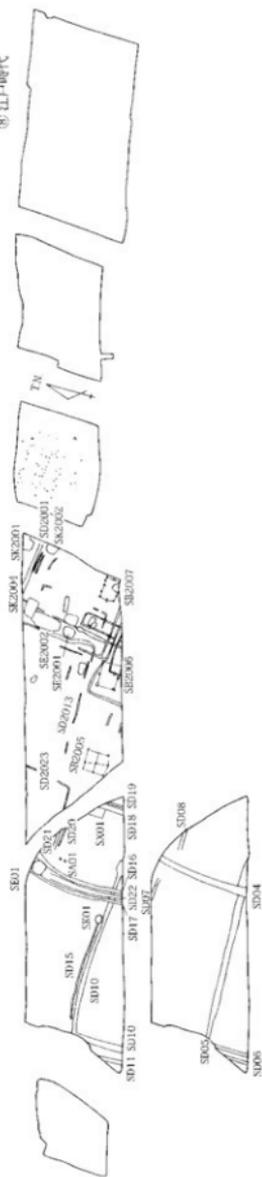


第 211 図 遺構配置図 (1)

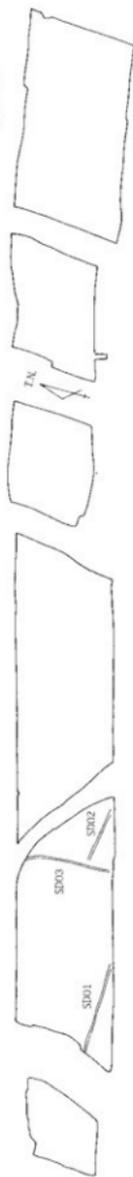
⑦ 古代V期 (12世紀)



⑧ 江戸時代



⑨ 近代



第 213 図 遺構変遷図 (3)

これらの遺構のなかで、S D 4003は9世紀まで、S D 1006は10世紀まで、S D 2042・3002は12世紀まで継続する。

掘立柱建物跡は1工区・2工区・5工区の遺跡西半域に集中して検出されており、東側はS B 3001・6001の2棟のみである。西側の掘立柱建物跡の分布を検討すると、二つの建物群に分かれる。まず、1工区のS D 1006の北側に集中するAグループであり、もう一つは2工区中央から5工区にかけて存在するBグループである。建物の規模は、長軸辺8mを超える大規模な建物、4～6mの範囲の中規模な建物、3.5m未満の小規模な建物に分けられる。大規模な建物はS B 1001・2004・3001である。S B 1001は1工区で検出された他の建物とは異なり、S D 1006の南側に単独に存在する。S B 2004は4.47×8.25mを測る建物であり、S B 3001はS D 3002の南側に位置し5×2間(9.80×3.75m)の総柱の掘立柱建物跡であり、双方とも新田・本村遺跡と小山・南谷遺跡において最大規模の建物である。規模のみで見ると、Aグループ-S B 1001、Bグループ-S B 2004というように、各建物群に大規模の建物が1棟ずつ存在する。中規模の建物はS B 1002・1003・1007・2001～2002・2008～2011・5003・5006であり、この中でS B 1002・1007・2002・5003・5006は総柱である。小規模の建物はS B 1004～1006・1008・1009・5002である。小・中規模の建物は主軸方向の異なるものや切り合いがあり、時期的に細分することができる。

溝は多数検出されているが、最も注目すべき溝は1工区のS D 1006と3工区のS D 3002・3023である。S D 1006は幅3.30～4.50m、深さ0.50～0.90mを測る大規模な溝であり、土師器や須恵器を中心とする多量の土器や瓦と共に緑釉、越州窯青磁、青銅製品、硯、上馬等が出土している。N-5°-Eの北部条甲地割に伴う溝であるが、通常の溝に比べて極めて大規模な溝であり運河的な性格を有する可能性が考えられる。S D 3002も幅4.60～6.50m、深さ1.30mを測る大規模な溝で、小山・南谷遺跡のS D 701と同一溝であり、N-5°-Eの北部条甲地割の坪界溝である。

古代Ⅲ期(9世紀 第212図 ⑤)

9世紀になると急激に遺構は減少し、1工区のS D 1010と前期より継続するS D 1006・2042・3002・4001・4003である。

古代Ⅳ期(10世紀 第212図 ⑥)

検出した遺構は1工区S D 1003、S K 1010・1011、2工区S D 2040と前期より継続するS D 1006・2042・3002である。S D 1006の掘削時期は上～下層の出土遺物に8世紀前半の遺物が含まれていることから、上限は8世紀初頭に遡る可能性があり、下限(最終埋没)は10世紀に求められる。

古代Ⅴ期(12世紀 第213図 ⑦)

当該期の遺構は以前から継続するS D 2042・3002の溝2条である。S D 3002の掘削時期は出土遺物に8世紀前半の遺物が含まれていることから、上限は8世紀初頭に遡る可能性があり、下限(最終埋没)は12世紀後半頃に求められる。

江戸時代(第213図 ⑧)

遺跡のほぼ全域において遺構が検出された。掘立柱建物跡3棟、柱列1基、井戸5基、土坑11基、溝45条、柱穴多数、性格不明遺構1基と3面の犁跡である。1工区にはS A 01、S E 01、S K 01、S D 04～22、S X 01、3面の犁跡、2工区にはS B 2005～2007、S D 2001～2013・2017・2023・2027～2037・2039～2041、3工区には犁跡、5工区には柱穴群がある。

2工区の掘立柱建物跡は約12.5mの間隔をもって建てられており、S B 2006の南列側柱を西方に延長するとS B 2005の中央側柱に到り、S B 2006の北列側柱を東方に延長するとS B 2007の

南列側柱に到る。これらの建物は規則性に基づいて建てられている。また、5工区では同規模で同一埋土の柱穴が多数検出され、数棟の建物の存在が想定される。

1工区で検出した溝と3面の犁跡は、 $N-11^{\circ}-E$ を示す近世条里型水田に伴う遺構である。第2面の溝は第3面の溝の位置・方向を踏襲しており、南北方向で平行に延びる2ないし3条の溝は畦道の側溝であると考えられ、東西方向の溝は水田を区画する用水路である。犁跡は溝に平行する方向と直交する方向に引かれている。

近代 (第213図 ㉑)

1工区のSD 01～03のみである。

第2節 SD 1006・SD 3002と条里地割

高松平野における表層条里から推定した条里プランは、高松琴平電鉄長尾線より以西の平野部のほぼ全域に確認されるが、春日川や新川の氾濫地域である北東部はほとんど検出されていない。しかし、新田本村遺跡や小山・南谷遺跡の所在する高松町には孤立した状態で条里地割がみられる¹⁾。広域に展開している前者の条里地割が南海道を基準とし、その方向は $N-11^{\circ}-E$ を示すのに対して、後者は小区域内で $N-5^{\circ}-E$ を示す異方位条里地割である。この異方位の地割を考古学的に確認したのが、小山・南谷遺跡と奥の坊権現前遺跡である。小山・南谷遺跡の調査において $N-5^{\circ}-E$ の異方位条里坪界溝とそれに伴う集落跡が検出され²⁾、藤好史郎氏はこの地割を北部条里地割として報告している³⁾。奥の坊権現前遺跡でも $N-5^{\circ}-E$ の溝を検出し、その報告書の中で大嶋和則氏は山田郡北部の地形復元を行い、表層条里から北部条里地割の施行範囲を推定している⁴⁾。

今回の新田本村遺跡において検出した2条の大規模な溝(SD 1006・SD 3002)は、東西方向に延びる直線的な溝である。3工区の北東隅に検出したSD 3002は、東側に隣接する小山・南谷遺跡のSD 701に対応する溝である。SD 3002は、上端の幅4.60～6.50 m、検出面からの深さ1.30 mを測り、溝の方向は $N-92^{\circ}-E$ である。出土物からこの溝の時期は8世紀～12世紀後半と考えられる。1工区で検出したSD 1006は、上端の幅3.30～4.50 m、検出面からの深さ0.55～0.90 mを測り、 $N-90^{\circ}-E$ 方向を示す大規模な溝である。遺物は多量の土器をはじめ瓦や硯、土馬、青銅製品等が出土しており、その時期は8世紀～10世紀と考えられる。

北部条里地割の表層条里から推定した条里プランは、前述した藤好、大嶋両氏が行っているの



第214図 周辺条里地割

ここでは新田本村遺跡と小山・南谷遺跡を中心とした狭い範囲の地割を検討してみる。S D 3002 と S D 701 の条里地割を A-A' ライン、南側の S D 1006 の条里地割を B-B' ラインと仮称する。北部条里地割は新田街道より西側にほとんど展開しておらず、大嶋氏は新田本村遺跡の西側に海が大きく入り込んでいたと推定する。実際、今回の調査においても S D 1006 より西側には条里地割に伴う溝は検出されていない。そこで東側のみに条里プランを復元してみる。A-A' ラインを東に延ばしていくと、小山・南谷遺跡から鍋池間の水田区画、鍋池の北岸から長尾池南端を通り、新池北端に達する北部条里地割となる。同様に B-B' ラインは、S D 1006 の東から新田街道に延びる道路、新田街道から鍋池南側にある水田区画、鍋池から新池中央まで延びる道路を通る北部条里地割となる。A-A' ラインと B-B' ラインの南北間の距離は約 60 m を測り、ほぼ条里地割の半町間隔である。北部条里地割の南端は新田街道を除けば七面大明神の鎮座する小山付近の西方に張り出した丘陵付近であると考えられており、その南端の条里地割と B-B' ラインの間隔は約 60 m である。すなわち、A-A' ラインは小山付近の北部条里地割の南端からほぼ 1 町北の位置にあたる北部条里坪界溝であることが今回の調査で再認識された。S D 1006 と S D 3002 は一般的な条里地割に伴う溝と比較すると、極めて規模の大きな溝であり、運河的な性格をもつと考えられる。

1) 「讃岐国弘福寺領の調査」高松市教育委員会 1992

「讃岐国弘福寺領の調査Ⅱ」高松市教育委員会 1999

2) 『原道高松志度線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告 小山・南谷遺跡Ⅰ』香川県教育委員会 1997

3) 藤好史郎「屋島城と城山城 —古代山城研究の視点—」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅴ』

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1997

4) 大嶋和則「高松市東部運動公園（仮称）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 奥の坊遺跡群Ⅱ（奥の坊権現前遺跡）」高松市教育委員会 2004

第3節 出土遺物

1. 陶硯について

日本の「硯」については今までに数多くの研究がなされており、平面形態による分類や編年に関してほぼ確立していると言える。日本における「硯」は中国の影響を受け、7世紀頃より日本で硯が製作されるようになることと「円面硯」から「風字硯」への変遷も確認されている。香川県内での「硯」の研究は、出土点数が少ないことも影響してほとんど行われていなかった。しかし、1995年に片桐孝治氏が「香川県出土古代陶硯についての一考察」という論文を発表した¹⁾。片桐氏は1995年までに県内で確認された陶硯の集成と分類を行い、さらに編年を提示した。それから10年を経過し、「陶硯」の出土例が増加している。今回は1995年以後の資料を集成し、片桐分類を基にそれらを分類したい。

円面硯

獸脚硯Ⅰ-A類（第215図-1）

1は打越窯跡灰原出土の須恵器獸脚硯（Ⅰ-A類）の脚である²⁾。時期は共伴遺物から7世紀前半～中頃と考えられる。

獸脚硯Ⅰ-B類（第215図-2～4）

2は小谷窯跡灰原 E 3グリッドの3層より出上の須恵器獸脚硯（Ⅰ-B類）の脚である³⁾。底面を含めて外面はケズリ調整により面取りし、断面は方形である。時期は共伴遺物から7世紀末～8世紀初頭と考えられる。3は小谷窯跡灰原 E 5グリッド北半部より出土の須恵器獸脚硯（Ⅰ-B類）の脚である。底面を含めて外面はケズリ調整により面取りし、断面は方形である。時期は共伴遺物から7世紀末～8世紀初頭と考えられる。

4は打越窯跡灰原出土の須恵器獸脚硯(Ⅰ-B類)の脚である。端部を前方に大きく擴み出している。時期は共存遺物から7世紀前半～中頃と考えられる。

脚硯Ⅱ類(第215図-5)

5は山村遺跡(株式会社百十四銀行城西支店)の基3層出土の須恵器脚硯の脚である⁴⁾。香川県内で唯一の出土である。断面三角形の脚で硯部を支える。

圈足硯Ⅲ-A類(第215図-6～8)

6は末3号窯跡出土の須恵器圈足硯(Ⅲ-A-1)である⁵⁾。硯面陸部端に小さい内堤と海部端に低い外堤が付く。

7は前田東・中村遺跡1③SD19出土の須恵器圈足硯(Ⅲ-A-1・a)である⁶⁾。硯面陸部端に小さい内堤と海部端に外堤が付く。透かしは方形である。時期は9～10世紀である。

8は打越窯跡灰原出土の須恵器圈足硯(Ⅲ-A-a)である。脚端部は若干内湾し、方形の透かしを有する。時期は共存遺物から7世紀前半～中頃と考えられる。

圈足硯Ⅲ-B類(第215図-9～18)

9は小谷窯跡2号窯出土の須恵器圈足硯(Ⅲ-B-1・b)である。海部端に外堤が付き、脚部との境に低い突帯を巡らす。脚部に楕円形ないし隅丸方形の透かしがある。時期は共存遺物から7世紀末～8世紀初頭と考えられる。

10は空港跡地遺跡E地区包含層Ⅱ層出土の須恵器圈足硯(Ⅲ-B-2)である⁷⁾。陸部は中央で僅かに凹み、海部端は外堤を内傾気味に付ける。

11は空港跡地遺跡E地区包含層Ⅱ層出土の須恵器圈足硯(Ⅲ-B-2)である。外堤は直立し、脚部との境に低い突帯を巡らす。

12は打越窯跡灰原出土の須恵器圈足硯(Ⅲ-B)である。

13は川津一ノ又遺跡SD11下層(第2層)出土の須恵器圈足硯(Ⅲ-B-a)である⁸⁾。脚部は「ハ」の字に開き、長方形の透かしを持つ。時期は7世紀前半～10世紀前半である。

14は新田本村遺跡SD1006上層出土の須恵器圈足硯(Ⅲ-B-a)である。脚部は「ハ」の字に開き、長方形の透かしを持つ。時期は7世紀前半～10世紀前半である。

15は八丁地遺跡SR103出土の須恵器圈足硯(Ⅲ-B-a)である⁹⁾。脚部に長方形の透かしを持つ。時期は7～8世紀と考えられる。

16は小谷窯跡1号窯前庭部出土の須恵器圈足硯(Ⅲ-B-a)である。脚部に長方形の透かしを持つ。時期は7～8世紀と考えられる。時期は共存遺物から7世紀末～8世紀初頭である。

17は正箱遺跡・薬王寺遺跡SE01出土の須恵器圈足硯(Ⅲ-B-a)であり¹⁰⁾、片桐氏の集成に漏れていた資料である。

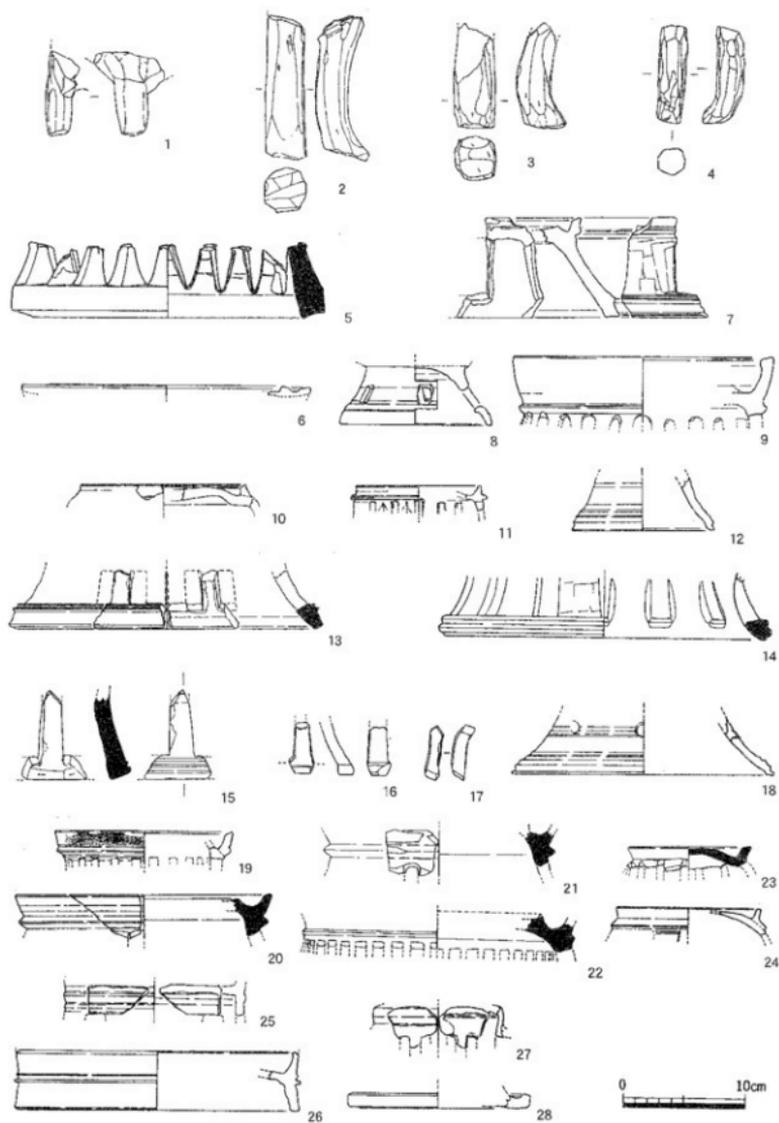
18は打越窯跡灰原出土の須恵器圈足硯(Ⅲ-B-c)である。

圈足硯Ⅲ-C類(第215図-19～22)

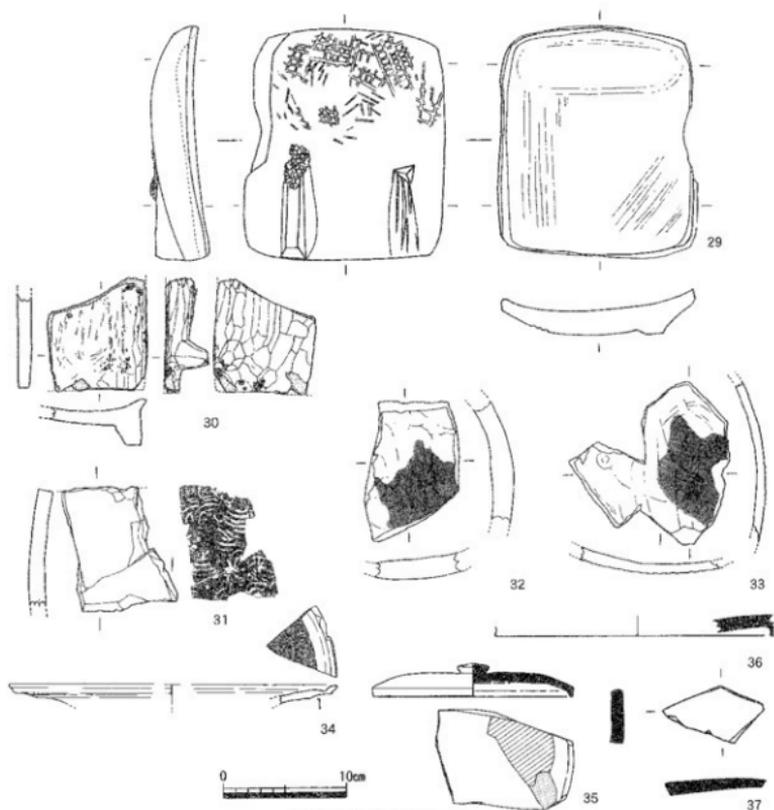
19は川北遺跡H8グリッド出土の須恵器圈足硯(Ⅲ-C-2・a)である¹¹⁾。海部端に断面方形のやや高い外堤が付く。透かしは長方形である。

20は川津一ノ又遺跡SD11第1層(下)出土の須恵器圈足硯(Ⅲ-C-2・b)である。硯部は高い陸部と海部があり、高い外堤と脚部との境に低い突帯を巡らす。時期は7世紀前半～10世紀前半である。

21は川津一ノ又遺跡SX01出土の須恵器圈足硯(Ⅲ-C-2・a)である。脚部上端に低い突帯を巡らす。時期は10世紀である。



第 215 图 视集成图 (1)



第 216 図 碗集成図 (2)

22 は川津一ノ又遺跡包含層出土の須恵器圈足碗 (Ⅲ-C-1・a) である。陸部周囲に内堤があり、脚部の透かしは長方形である。

圈足碗Ⅲ-D類 (第 215 図-23・24)

23 は小山・南谷遺跡 S D 17 下層出土の須恵器圈足碗 (Ⅲ-D-2・a) である¹²⁾。陸部から脚部が一体成形され、脚部に 12 個の長方形透かしがある。時期は 9 世紀後半である。

24 は川津東山田遺跡 I 区 S R 02(B) 第 2 層出土の須恵器圈足碗 (Ⅲ-D-2・a) である¹³⁾。陸部から脚部が一体成形され、透かしは方形である。

圈足碗Ⅲ-F類 (第 215 図-25・26)

25 は西末則遺跡 A 6 区第 8 層川上の須恵器圈足碗 (Ⅲ-F-2・a) である¹⁴⁾。脚部は垂直であり、方形の透かしを持つ。

26 は田村遺跡 S P 172 川上の須恵器圈足碗 (Ⅲ-F-2) である¹⁵⁾。脚部は垂直である。時期は平安時代後期と考えられる。

圈足碗Ⅲ-G類 (第 215 図-27・28)

27 は川北遺跡包含層出土の須恵器圈足碗 (Ⅲ-G-a) である。

28は打越窯跡灰原出土の須恵器圈足硯(Ⅲ-G)である。脚部が付かない硯である。

風字硯(第216図-29・30)

29は多肥松林遺跡Ⅵ・XⅡ区SR01・02出土の須恵器単面硯(Ⅰ-B類)である¹⁶⁾。ケズリ状の面取り整形が施される。

30は田所深池窯跡北溝川上出土の須恵器単面硯(Ⅰ-C類)である¹⁷⁾。硯面は陸部から海部に緩やかに傾斜し、硯縁はヘラ切りにより面取りされる。硯面の調整は指頭ナデ、裏面は格子口のタキが施される。時期は共伴遺物から11世紀末と考えられる。

転用硯(第216図-31~37)

31・32は川津川西遺跡SD135下層出土の須恵器転用硯である¹⁸⁾。裏ないし壺の体部片を転用し、内面に磨滅痕と土痕がある。時期は共伴遺物から8世紀後半~13世紀と考えられる。

33は中寺庵寺跡第3テラス出土の須恵器転用硯である¹⁹⁾。裏の体部片を転用し、内面に磨滅痕がある。時期は共伴遺物から10世紀と考えられる。

34は牛野南口遺跡SP01出土の須恵器転用硯である²⁰⁾。杯蓋を転用したもので、内面が著しく磨滅する。時期は8世紀前半~中葉である。

35は坪井遺跡SD44出土の須恵器転用硯である²¹⁾。杯蓋を転用したもので、内面が著しく磨滅し、僅かに黒が付着する。時期は8世紀後葉である。

36・37は新田本村遺跡SD1006上層出土の須恵器転用硯である。36は底径23cmの皿を転用し、内面が著しく磨滅する。37は内面が著しく磨滅する。土器の湾曲が小さく、円面硯の陸部の可能性もある。時期は8世紀~10世紀である。

1995年までに県内で確認された陶硯は22遺跡55点であり、今回新たに集成した陶硯は、21遺跡37点である。ただし、片桐氏の集成に漏れていた正箱遺跡・薬王寺遺跡や重複する多肥松林遺跡、前田東・中村遺跡、田村遺跡、志度末窯、打越窯跡を含めているので、遺跡数は15となる。現在までに香川県内において出土した陶硯は、37遺跡92点を数える。

陶硯が出土した37ヶ所の遺跡の性格を分析すると、窯・寺院・官衙・集落に分けられる。その内訳は以下ようになる。

窯	野田池北窯、千石場窯、打越窯跡、庄屋原5号窯、明神谷灰原、北条池1号窯跡、すべつと1号窯、すべつと6・7号窯、かめ焼谷1号窯、西村遺跡、団子出窯跡、公洲池2号窯、志度末1号窯・3号窯、小谷窯跡、田所深池窯跡
寺院	讃岐国分寺跡、田村遺跡、中寺庵寺跡
官衙	讃岐国府跡
集落	宮脇遺跡、金蔵寺下所遺跡、下川津遺跡、西村遺跡、国分寺下口名代遺跡、正箱遺跡・薬王寺遺跡、多肥松林遺跡、前田東・中村遺跡、空陸跡地遺跡、川北遺跡、川津・ノ又遺跡、小山・南谷遺跡、川津東山田遺跡、西木剛遺跡、八丁地遺跡、川津川西遺跡、牛野南口遺跡、坪井遺跡、新田本村遺跡

片桐氏は、前述の論文で香川県においても7世紀後半から出現した硯は獸脚硯を主とし、8~9世紀に円面硯、10~12世紀に風字硯に変わるといふ変遷を確認し、「陶硯」の出現と定形化に律令制度や寺院造営が密接な関係を持っていたと論考している。今回の集成においても片桐氏の見解を再確認する内容になっている。

今回報告した新田本村遺跡を含め下川津遺跡、前田東・中村遺跡、小山・南谷遺跡などを典型的な例として、陶硯を出土した集落には大型掘立柱建物跡や糸里に沿う溝等の存在が確認され、遺跡全体

における区画性と配置の企画性が明瞭であり、遺構と出土遺物に関して官衙的要素を示している。これらの集落は「官衙関連遺跡」としての性格を有しているのである。

2. 上馬について

古来より人は、天災や厄災を防ぐ目的や病気を治す時や何かを祈願する時などことあるごとに「まじない」を行ってきた。さまざまな祭祀があり、それに伴いいろいろな種類の祭祀具が用いられてきた。新田・本村遺跡において出土した「土馬」は祭祀具のうちで代表的なものの一つであり、祈雨のための動物犠牲として牛馬の代わりに用いたか、馬が疫神の乗り物であることからその猛威を防ぐため投棄した等、いろいろな意見がある²²⁾。香川県において少数ではあるが、上馬が出土している。今回それらを集成する(第217・218図)。

下川津遺跡²³⁾

1はSHⅢ 23より出土した。首部であり、手綱を表わした沈線がある。時期は共伴遺物から7世紀初葉と考えられる。2は第1低地帯流路2より出土した。脚部である。時期は共伴遺物から7世紀初葉～8世紀中葉である。3・4は第1低地帯流路3より出土する。3は頭部であり、目鼻口を表現している。4は体部前半であり、背部に鞍の痕跡がある。時期は共伴遺物から7世紀末～8世紀初頭である。5～11は第1低地帯流路5より出土し、時期は共伴遺物から6世紀後半～7世紀である。5は須恵質で最も保存状態の良く、薄い粘土帯で手綱等を表現し、鞍の痕跡がある。6は四肢と尾を欠損する。鞍は残存するが馬具表現の一部を簡略化する。7は頭部と四肢を欠損する。粘土帯と列点文で手綱や尻繫を表現し、鞍と鎧表現の隆起がある。8は頭部であり、目鼻口のみ表現する。9は頭部であり、沈線で手綱を表現する。10は頭部であり、粘土帯と列点文で面繫を表現している。11は頭部であり、目鼻口のみ表現する。

川津川西遺跡¹⁸⁾

12はSD 135とSX 19より出土した。頭部及び体下半部、四肢を欠損する。粘土帯と列点文で手綱等を表現し、鞍の痕跡がある。時期は共伴遺物から7世紀～13世紀である。

川津ノ又遺跡^{8・24・25)}

13はSD 11上層より出土した。脚部(右足)と考えられる。時期は8世紀中頃である。14はSD 11第1層(下)より出土した。脚部(右足)である。偶蹄目科の獣の脚と思われ、獣脚碗の可能性もある。時期は共伴遺物から8世紀中頃である。15・16はSD 11下層(第2層)より出土した。脚部であり、長く伸び、先端部で前方に摘み出す。15が右足、16が左足である。時期は共伴遺物から8世紀中頃である。

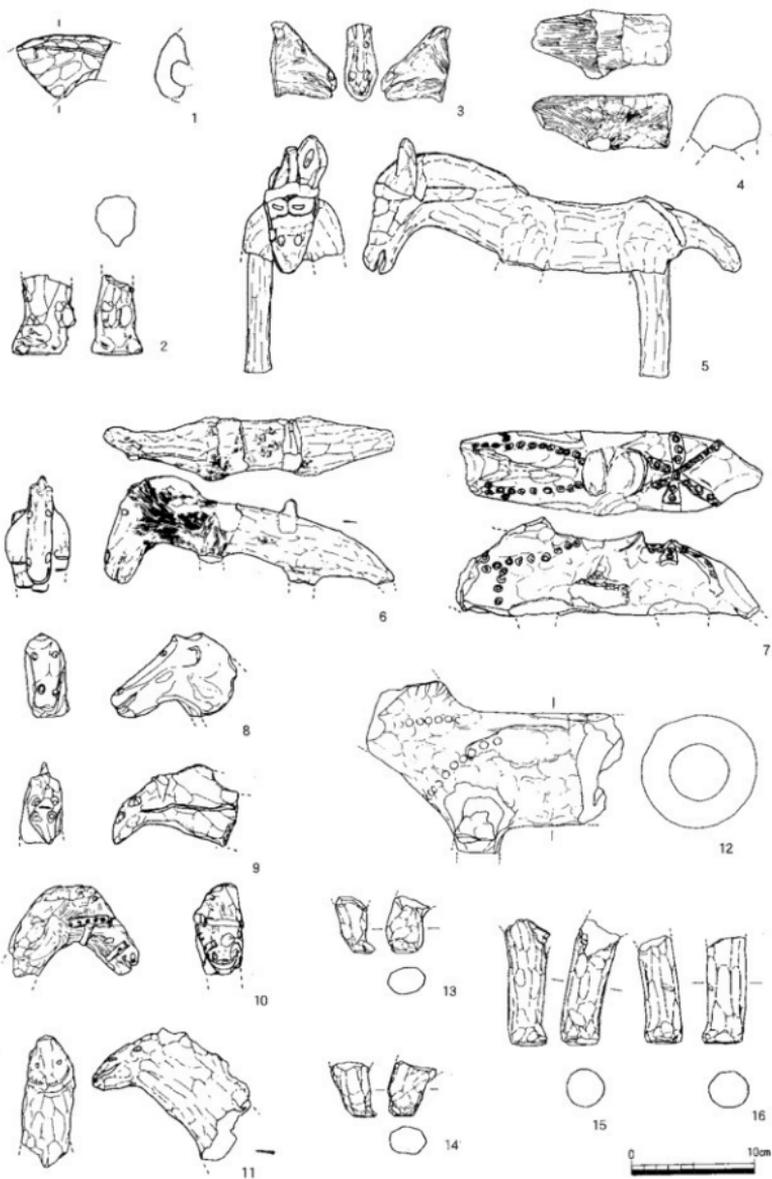
17は2②③調査区第8・9層より、18は2②③調査区第6層より出土した。両方とも須恵質の脚部である。19はSD 053/070より出土した。脚部である。時期は8世紀後半～10世紀前半である。20はB区包含層より出土した。頭部～首部であり、鬘と手綱を沈線で表現する。21はC・D区包含層より出土した。体部であり、鞍の痕跡がある。

打越窯跡²⁾

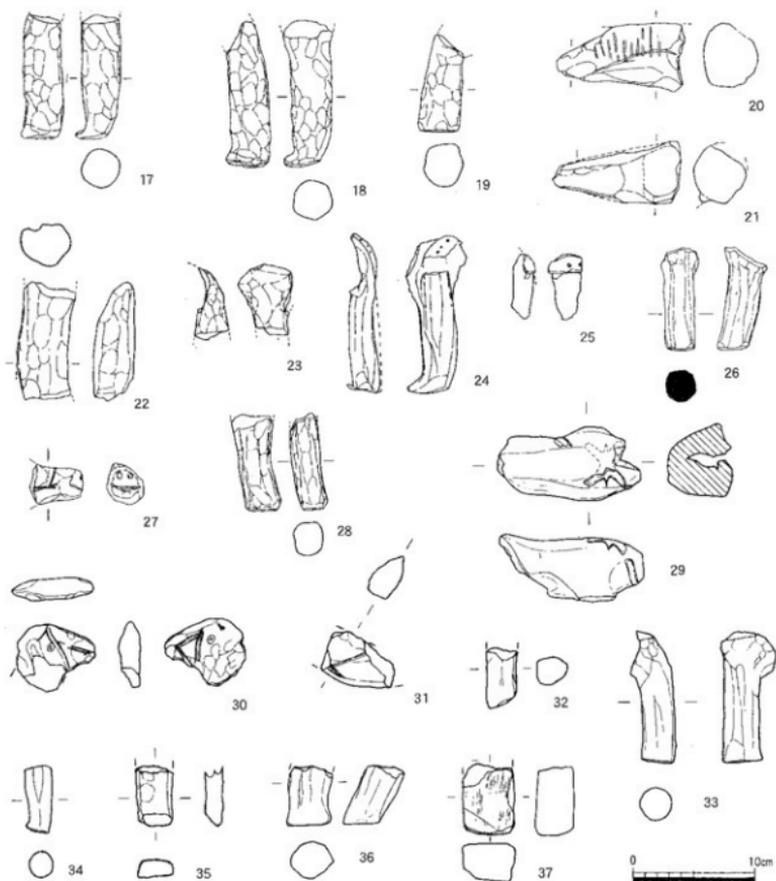
22～25は灰原より出土した。全てが脚部であり、24・25は粘土帯と列点文で馬具を表現する。時期は共伴遺物から7世紀前半～中頃と考えられる。

原間遺跡²⁶⁾

26は第Ⅱ調査区の第11岡土層断面B-B'第13・14層より出土した。須恵質の脚部である。時期は7世紀中頃である。



第 217 图 土馬集成图 (1)



第 218 図 土馬集成図 (2)

前田東・中村遺跡²⁷⁾

27 は C 5 区包含層より出土した。頭部であり、手綱を沈線で表現する。

小山・南谷遺跡¹²⁾

28 は S D 701 下層より出土した。脚部 (右足) と考えられる。時期は 8 世紀である。

松縄下所遺跡²⁸⁾

29 は南潤査区遺構面より出土した。体部であり、粘土帯で尻繫と鎧を表現する。

新田本村遺跡

30～32 は 6 工区包含層より出土した。30 は頭部であり、面繫を沈線で表現する。31 は首部であり、手綱を沈線で表現する。32 は脚部である。33 は 1 T 区 S K 1010 より出土する。脚部であり、やや

長く延びる。時期は8世紀である。34・35は1丁区SD1006下層より出土した。脚部であり、34は断面円形を呈し、先端部を前方に少し狭み出す。35は断面長方形を呈する。時期は8世紀である。36・37は1上区第4面包含層より出土した。脚部であり、36の断面はやや角張る円形、37は方形を呈する。

以上のように、現在までに川上している土馬は9遺跡37点を数える。共存する遺物は8世紀を中心とする時期である。体部の断面は、1・12・29のように中空円筒状を呈する土馬と3～11・20・21・23・30・31のように中空のない円柱状の土馬がある。製作技法の違いが認められる。手觸りや面繫・尻繫の表現は沈線と粘土帯と粘土帯＋刺突文の3種類があり、鞍は隆起で表わしている。馬の顔も含めて写実的な土馬とやや簡略化した土馬が存在する。脚部は円柱状の粘土塊であり、その表現には写実的なもの(2)、端部を前方に狭み出したもの(13～18・24・34)、端部の平坦な棒状のもの(5・19・26・28・33・35・36)がある。

土馬が出土した遺跡のうち高松市の松縄下所遺跡を除いた8ヶ所の遺跡は、前項で集成した「硯」も出土している。硯と土馬は官衛的要素を示す遺物であり、遺跡の性格を反映していると考えられる。

- 1) 片桐孝治「香川県出土古代陶器についての一考察」『香川考古 第4号』香川考古刊行会 1995
- 2) 渡部昭夫・森格也・宮野徳久「打越奈跡出土須臾器について」『(財)香川県埋蔵文化財調査センター 研究紀要V』(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1997
- 3) 「高松東フレクトリーパーク造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 小谷窯跡・塚谷古墳」香川県教育委員会 2002
- 4) 「田村遺跡発掘調査報告書」丸亀市教育委員会 2002
- 5) 「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第8冊 野牛古墳・木3号空跡」香川県教育委員会 2000
- 6) 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第五十五冊 前田東・中村遺跡Ⅱ」香川県教育委員会 2005
- 7) 「空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊 空港跡地遺跡Ⅱ」香川県教育委員会 1997
- 8) 「中小河川大東川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川津・ノ又遺跡」香川県教育委員会 1997
- 9) 「県道改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 八丁地遺跡 木村・横内遺跡」香川県教育委員会 2000
- 10) 「県道山崎崎原線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 止宿遺跡・薬王寺遺跡」香川県教育委員会 1994
- 11) 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第五十一冊 川北遺跡・三輪山遺跡」香川県教育委員会 2004
- 12) 「県道高松志度線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 小山・南谷遺跡Ⅰ」香川県教育委員会 1997
- 13) 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第三十八冊 川津東山田遺跡Ⅰ区」香川県教育委員会 2001
- 14) 「香川県農業試験場移転事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 西末洲遺跡Ⅰ」香川県教育委員会 2005
- 15) 「県道高松丸亀線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 田村遺跡」香川県教育委員会 2004
- 16) 「高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 多肥松林遺跡」香川県教育委員会 1999
- 17) 「県営ため池等整備事業(内編総合整備形)綾南南部地区工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業 田所深池遺跡Ⅰ」綾南町教育委員会 2000
- 18) 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第三十二冊 川津川西遺跡・飯山・本松遺跡」香川県教育委員会 1999
- 19) 「中寺庵寺跡 平成16年度」高松市教育委員会 2005
- 20) 「県道岡田吉通寺線道路環境整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 生野南口遺跡」香川県教育委員会 2003
- 21) 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第四十冊 坪江遺跡」香川県教育委員会 2003
- 22) 「古代の青銅遺跡Ⅱ 遺物・遺跡編」奈良文化財研究所 2004
- 23) 「瀬ノ大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡」香川県教育委員会 1990
- 24) 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第二十六冊 川津・ノ又遺跡Ⅰ」香川県教育委員会 1997
- 25) 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第三十冊 川津・ノ又遺跡Ⅱ」香川県教育委員会 1998
- 26) 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第三十九冊 原原遺跡Ⅰ」香川県教育委員会 2002
- 27) 「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊 前田東・中村遺跡」香川県教育委員会 1995
- 28) 「太田第2土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 松縄下所遺跡」高松市教育委員会 2001

第4節 新田本村遺跡の性格と歴史的位置づけ

新田本村遺跡は、縄文時代後期から近代までの長期間にわたって遺構が検出された。それぞれの遺構は出土遺物により縄文時代・弥生時代・古代・江戸時代・近代の5時期に分けられ、さらに古代を5小期に細分できる。5時期の中で最も遺構が多いのは古代であり、特にその中でも古代Ⅰ・Ⅱ期(7・8世紀)は掘立柱建物跡や溝、土坑等の遺構が集中しており、本遺跡の中心となる時期である。

本遺跡の所在する山田郡は、古墳時代以降、県下でも最も畿内勢力との強いつながりのある地域であり、それを示す遺跡が多数存在する。古墳時代前期には高松市茶臼山古墳¹⁾、長崎鼻古墳²⁾、後期には滝本神社古墳³⁾、久本古墳⁴⁾、山下古墳⁵⁾等があり、古代では山下廃寺、宝寿寺跡⁶⁾、前田東・中村遺跡⁷⁾等がある。さらに667年に築城の記載がある「屋嶋城」はこの地域と密接な関係が考えられる。屋嶋城に関しては、最近の発掘調査で外郭線の石垣やそれに伴う城門や水門が確認され、古代山城としての屋嶋城が明確になってきている⁸⁾。

本遺跡では7～8世紀の掘立柱建物跡群や大規模な溝が検出され、出土遺物には多量の土師器・須恵器をはじめ越州窯青磁を含む青磁や瓦・円面硯・土馬・刀子・青銅製品等が含まれている。また、隣接する小山・南谷遺跡でも同様な遺構が検出され、井戸からは金環・素文鏡・齋串が出土している⁹⁾。両遺跡は山田郡の郡衙が所在したと考えられている高松市前田東町から離れた屋島の南側に位置し、新田街道によって屋島と繋がっている。出土遺物には一般的な集落から出土しない円面硯や土馬などの特別な遺物や畿内中央と密接な関係を持つ遺物がある。また、第2節で論考した山田郡条里地割と異なる北部条里地割の施工には山田郡在地勢力との隔絶した造営主体の存在が考えられる¹⁰⁾。検出した遺構・遺物から判断すると、新田本村遺跡や小山・南谷遺跡は屋嶋城の後方支援を担う機能を持った官衙的な性格を有する遺跡である可能性が高い。後方支援としての役割は、大規模な溝の存在と当時の地形から港湾施設(津)が考えられるが、10世紀になり河川による砂の堆積の影響で港の機能を失うと同時に本遺跡は衰退していったと考えられる。

1) 『高松市茶臼山古墳緊急発掘調査概報』香川県教育委員会 1970

2) 『長崎鼻古墳』『木田郡誌』1940

『史跡天然記念物屋島—史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書1—』高松市教育委員会 2003

3) 萩原竜馬『高松市滝本神社古墳の測量調査』『香川考古 第2号』香川考古刊行会 1993

4) 小竹一郎『古高松郷土誌』1977

松本敏三『久本古墳』『教育香川』1977

『久本古墳』高松市教育委員会 2004

5) 小竹一郎『古高松郷土誌』1977

大山真充『変動の七世紀』『国分寺町史』2005

6) 『讃岐の古瓦屋』高松市教育委員会 1996

7) 『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊 前田東・中村遺跡』香川県教育委員会 1995

『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第五十五冊 前田東・中村遺跡Ⅱ』香川県教育委員会 2005

8) 『屋嶋城跡』高松市教育委員会 1981

『史跡天然記念物屋島—史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書1—』高松市教育委員会 2003

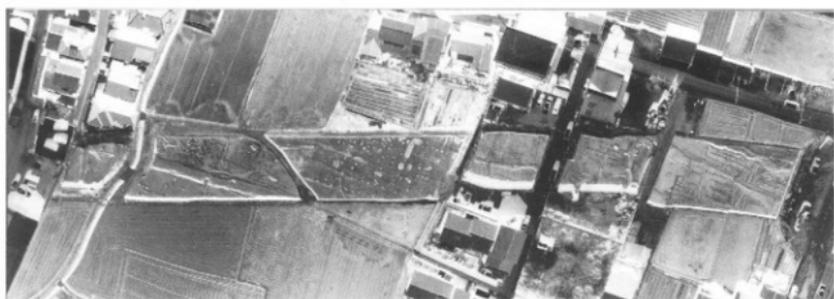
9) 『県道高松志度線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 小川・南谷遺跡Ⅰ』香川県教育委員会 1997

10) 藤好史郎『屋嶋城と城山城—古代山城研究の視点—』『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター—研究紀要V』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1997

品目	品名	規格	単位	数量	単価	金額	備考
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200

品名	規格	単位	数量	単価	金額	備考
001
002
003
004
005
006
007
008
009
010
011
012
013
014
015
016
017
018
019
020
021
022
023
024
025
026
027
028
029
030
031
032
033
034
035
036
037
038
039
040
041
042
043
044
045
046
047
048
049
050
051
052
053
054
055
056
057
058
059
060
061
062
063
064
065
066
067
068
069
070
071
072
073
074
075
076
077
078
079
080
081
082
083
084
085
086
087
088
089
090
091
092
093
094
095
096
097
098
099
100

行	品名	単位	数量	金額	品名	単位	数量	金額
1001	1001001	個	100	10000	1001001	個	100	10000
1002	1001002	個	100	10000	1001002	個	100	10000
1003	1001003	個	100	10000	1001003	個	100	10000
1004	1001004	個	100	10000	1001004	個	100	10000
1005	1001005	個	100	10000	1001005	個	100	10000
1006	1001006	個	100	10000	1001006	個	100	10000
1007	1001007	個	100	10000	1001007	個	100	10000
1008	1001008	個	100	10000	1001008	個	100	10000
1009	1001009	個	100	10000	1001009	個	100	10000
1010	1001010	個	100	10000	1001010	個	100	10000
1011	1001011	個	100	10000	1001011	個	100	10000
1012	1001012	個	100	10000	1001012	個	100	10000
1013	1001013	個	100	10000	1001013	個	100	10000
1014	1001014	個	100	10000	1001014	個	100	10000
1015	1001015	個	100	10000	1001015	個	100	10000
1016	1001016	個	100	10000	1001016	個	100	10000
1017	1001017	個	100	10000	1001017	個	100	10000
1018	1001018	個	100	10000	1001018	個	100	10000
1019	1001019	個	100	10000	1001019	個	100	10000
1020	1001020	個	100	10000	1001020	個	100	10000
1021	1001021	個	100	10000	1001021	個	100	10000
1022	1001022	個	100	10000	1001022	個	100	10000
1023	1001023	個	100	10000	1001023	個	100	10000
1024	1001024	個	100	10000	1001024	個	100	10000
1025	1001025	個	100	10000	1001025	個	100	10000
1026	1001026	個	100	10000	1001026	個	100	10000
1027	1001027	個	100	10000	1001027	個	100	10000
1028	1001028	個	100	10000	1001028	個	100	10000
1029	1001029	個	100	10000	1001029	個	100	10000
1030	1001030	個	100	10000	1001030	個	100	10000
1031	1001031	個	100	10000	1001031	個	100	10000
1032	1001032	個	100	10000	1001032	個	100	10000
1033	1001033	個	100	10000	1001033	個	100	10000
1034	1001034	個	100	10000	1001034	個	100	10000
1035	1001035	個	100	10000	1001035	個	100	10000
1036	1001036	個	100	10000	1001036	個	100	10000
1037	1001037	個	100	10000	1001037	個	100	10000
1038	1001038	個	100	10000	1001038	個	100	10000
1039	1001039	個	100	10000	1001039	個	100	10000
1040	1001040	個	100	10000	1001040	個	100	10000
1041	1001041	個	100	10000	1001041	個	100	10000
1042	1001042	個	100	10000	1001042	個	100	10000
1043	1001043	個	100	10000	1001043	個	100	10000
1044	1001044	個	100	10000	1001044	個	100	10000
1045	1001045	個	100	10000	1001045	個	100	10000
1046	1001046	個	100	10000	1001046	個	100	10000
1047	1001047	個	100	10000	1001047	個	100	10000
1048	1001048	個	100	10000	1001048	個	100	10000
1049	1001049	個	100	10000	1001049	個	100	10000
1050	1001050	個	100	10000	1001050	個	100	10000
1051	1001051	個	100	10000	1001051	個	100	10000
1052	1001052	個	100	10000	1001052	個	100	10000
1053	1001053	個	100	10000	1001053	個	100	10000
1054	1001054	個	100	10000	1001054	個	100	10000
1055	1001055	個	100	10000	1001055	個	100	10000
1056	1001056	個	100	10000	1001056	個	100	10000
1057	1001057	個	100	10000	1001057	個	100	10000
1058	1001058	個	100	10000	1001058	個	100	10000
1059	1001059	個	100	10000	1001059	個	100	10000
1060	1001060	個	100	10000	1001060	個	100	10000
1061	1001061	個	100	10000	1001061	個	100	10000
1062	1001062	個	100	10000	1001062	個	100	10000
1063	1001063	個	100	10000	1001063	個	100	10000
1064	1001064	個	100	10000	1001064	個	100	10000
1065	1001065	個	100	10000	1001065	個	100	10000
1066	1001066	個	100	10000	1001066	個	100	10000
1067	1001067	個	100	10000	1001067	個	100	10000
1068	1001068	個	100	10000	1001068	個	100	10000
1069	1001069	個	100	10000	1001069	個	100	10000
1070	1001070	個	100	10000	1001070	個	100	10000
1071	1001071	個	100	10000	1001071	個	100	10000
1072	1001072	個	100	10000	1001072	個	100	10000
1073	1001073	個	100	10000	1001073	個	100	10000
1074	1001074	個	100	10000	1001074	個	100	10000
1075	1001075	個	100	10000	1001075	個	100	10000
1076	1001076	個	100	10000	1001076	個	100	10000
1077	1001077	個	100	10000	1001077	個	100	10000
1078	1001078	個	100	10000	1001078	個	100	10000
1079	1001079	個	100	10000	1001079	個	100	10000
1080	1001080	個	100	10000	1001080	個	100	10000
1081	1001081	個	100	10000	1001081	個	100	10000
1082	1001082	個	100	10000	1001082	個	100	10000
1083	1001083	個	100	10000	1001083	個	100	10000
1084	1001084	個	100	10000	1001084	個	100	10000
1085	1001085	個	100	10000	1001085	個	100	10000
1086	1001086	個	100	10000	1001086	個	100	10000
1087	1001087	個	100	10000	1001087	個	100	10000
1088	1001088	個	100	10000	1001088	個	100	10000
1089	1001089	個	100	10000	1001089	個	100	10000
1090	1001090	個	100	10000	1001090	個	100	10000
1091	1001091	個	100	10000	1001091	個	100	10000
1092	1001092	個	100	10000	1001092	個	100	10000
1093	1001093	個	100	10000	1001093	個	100	10000
1094	1001094	個	100	10000	1001094	個	100	10000
1095	1001095	個	100	10000	1001095	個	100	10000
1096	1001096	個	100	10000	1001096	個	100	10000
1097	1001097	個	100	10000	1001097	個	100	10000
1098	1001098	個	100	10000	1001098	個	100	10000
1099	1001099	個	100	10000	1001099	個	100	10000
1100	1001100	個	100	10000	1001100	個	100	10000



1 遺跡全景



2 1工区全景



3 2工区全景



1 3工区全景



2 5・6工区全景



3 1工区第4面完掘状況(東から)



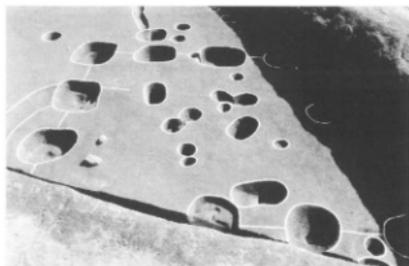
4 1工区第4面完掘状況(東から)



1 1工区第4面完掘状況(西から)



2 1工区第4面完掘状況(東から)



3 S B 1001 (西から)



4 S B 1002 (北から)



5 S B 1003 (北から)



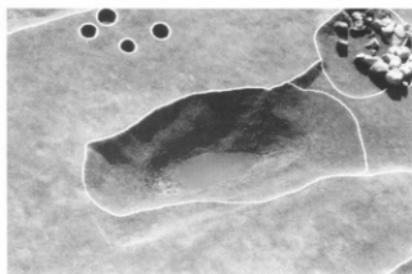
6 S B 1002 ~ 1006 (東から)



7 S D 1006 (西から)



8 S D 1006 遺物出土状況



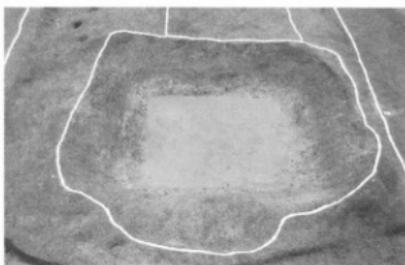
1 SE 1002 (東から)



2 SK 1139 (東から)



3 1工区第3面完掘状況 (東から)



4 SE 01 (北から)



5 1工区第2面完掘状況 (東から)



6 1工区第1面完掘状況 (東から)



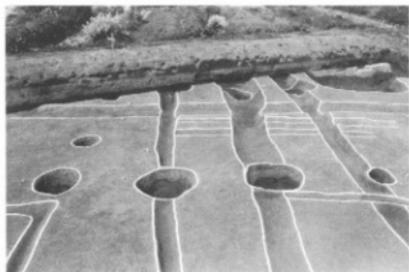
7 2工区完掘状況 (東から)



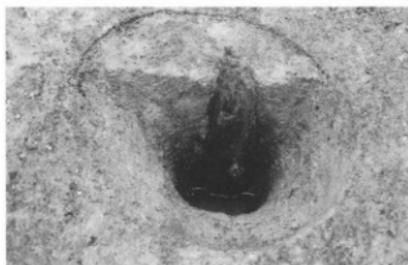
8 2工区完掘状況 (東から)



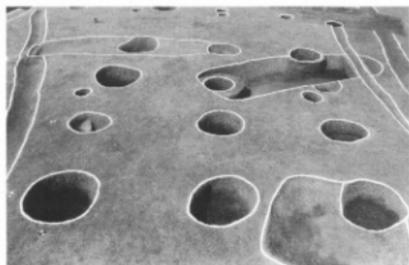
1 2 工区完掘状況(西から)



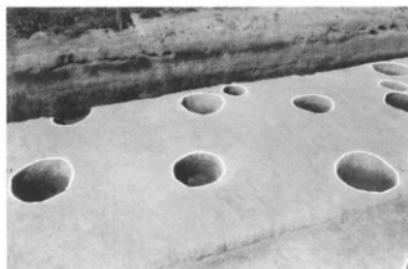
2 S B 2001(南から)



3 S B 2001 P-3 柱材



4 S B 2002(南から)



5 S B 2003(南から)



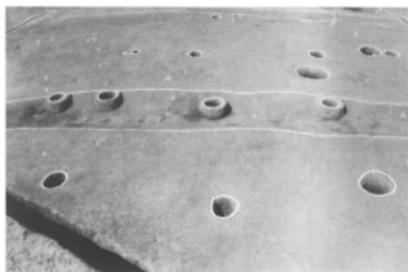
6 S B 2004(南から)



7 S P 2079 柱材



8 S P 2163 遺物出土状況(東から)



1 S B 2005 (南から)



2 S B 2006 (西から)



3 S E 2002 (東から)



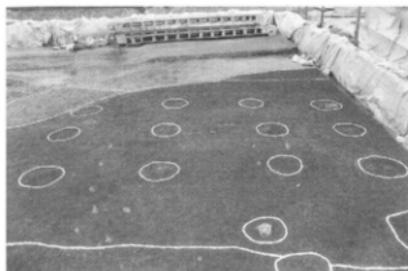
4 S K 2004 石臼



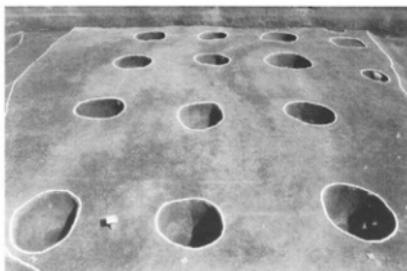
5 3 工区完掘状況 (西から)



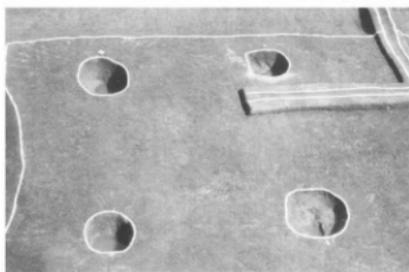
6 3 工区完掘状況 (西から)



7 S B 3001 検出状況 (南から)



8 S B 3001 (西から)



1 SB 3002(西から)



2 SD 3002 土層断面



3 SD 3003 ~ 3022(西から)



4 SD 3008(西から)



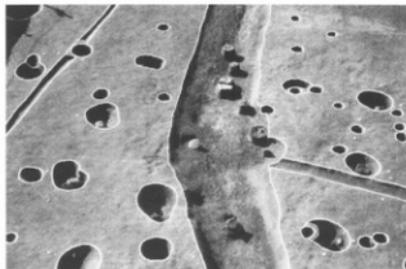
5 4工区完掘状況(東から)



6 SD 4001(北から)



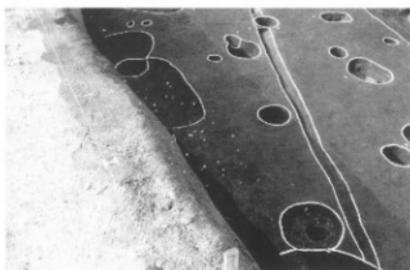
7 5工区完掘状況(東から)



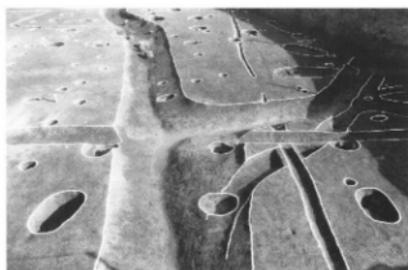
8 SB 5003(東から)



1 S B 5006 (南から)



2 S B 5004 (東から)



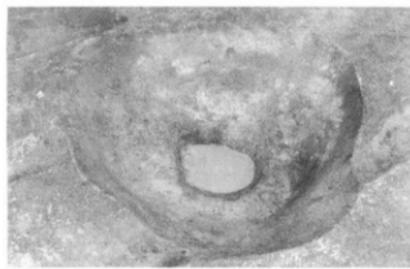
3 S D 5002 ~ 5005 (西から)



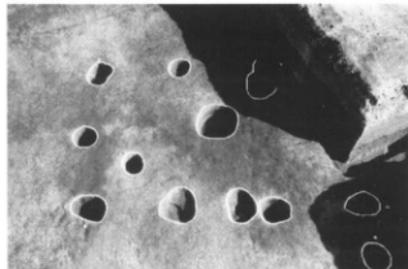
4 5工区SP (東から)



5 6工区完掘状況 (東から)



6 S K 6001 (南から)



7 S B 6001 (西から)



8 S D 6002 (南から)



86



178



150



208



153



212



154



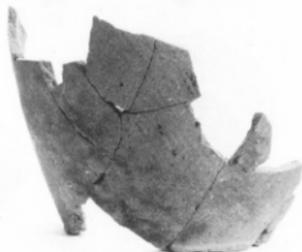
247



155



159



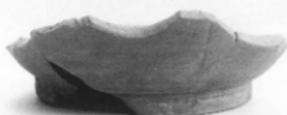
278



177



274



287



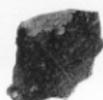
295



312



313



314



329



702



704



705



703



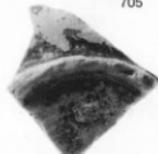
706



708



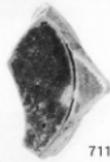
707



710



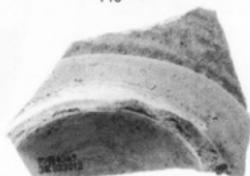
709



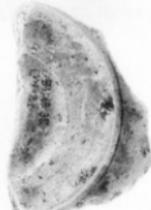
711



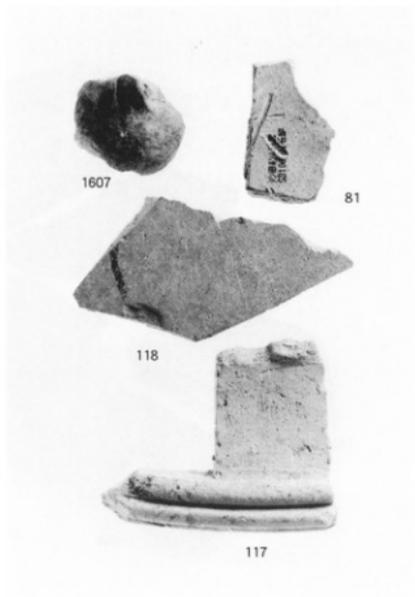
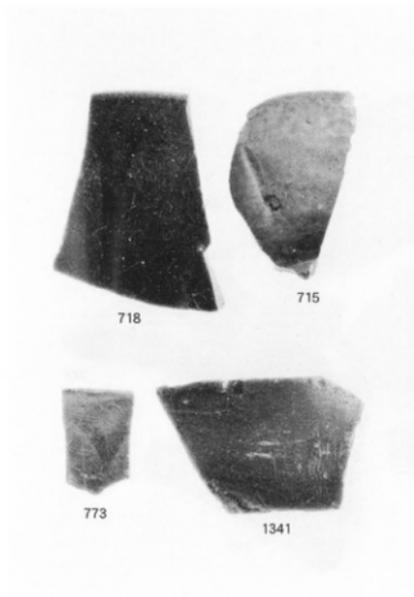
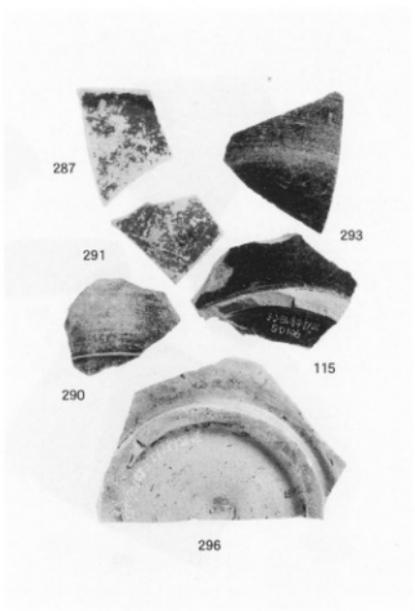
1375

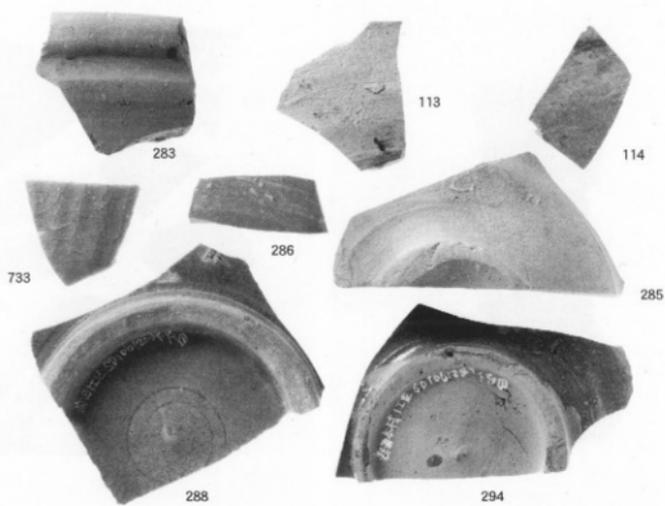


1152



1342





出土遺物(4)



357



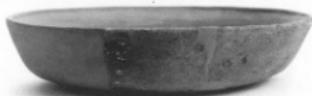
410



362



411



368



421



400



497



376



508



379



503



509



510



512



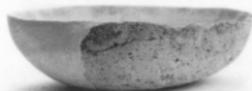
520



522



534



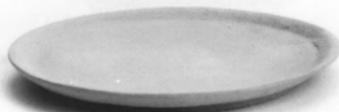
533



552



597



601



651



657



661



672



778



712



713



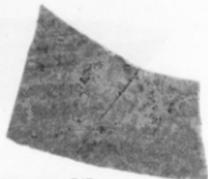
714



1601



716



717



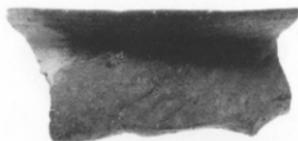
782



786



768



791



795



814



847



849



870



911



976



933



985



986



987



989



992



1014



1000



1011



1015



720



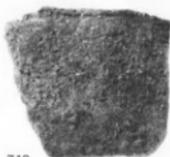
878



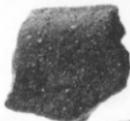
961



1029



719



879



937



1050



1033



1030

出 土 遗 物 (9)



1027



1071



1039



1066



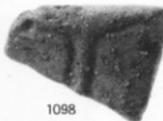
1497



1100



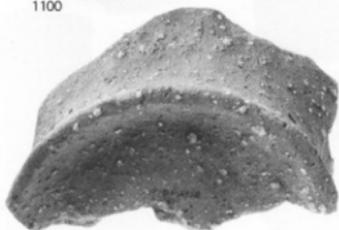
1101



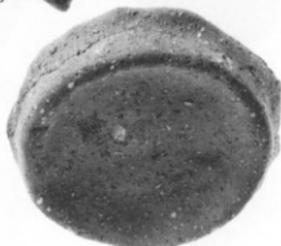
1098



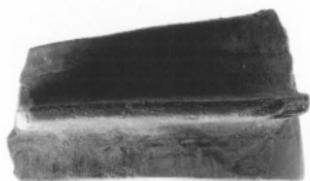
1099



1102



1103



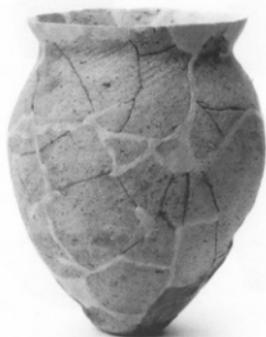
1109



1178



1179



1181



1182



1187



1206



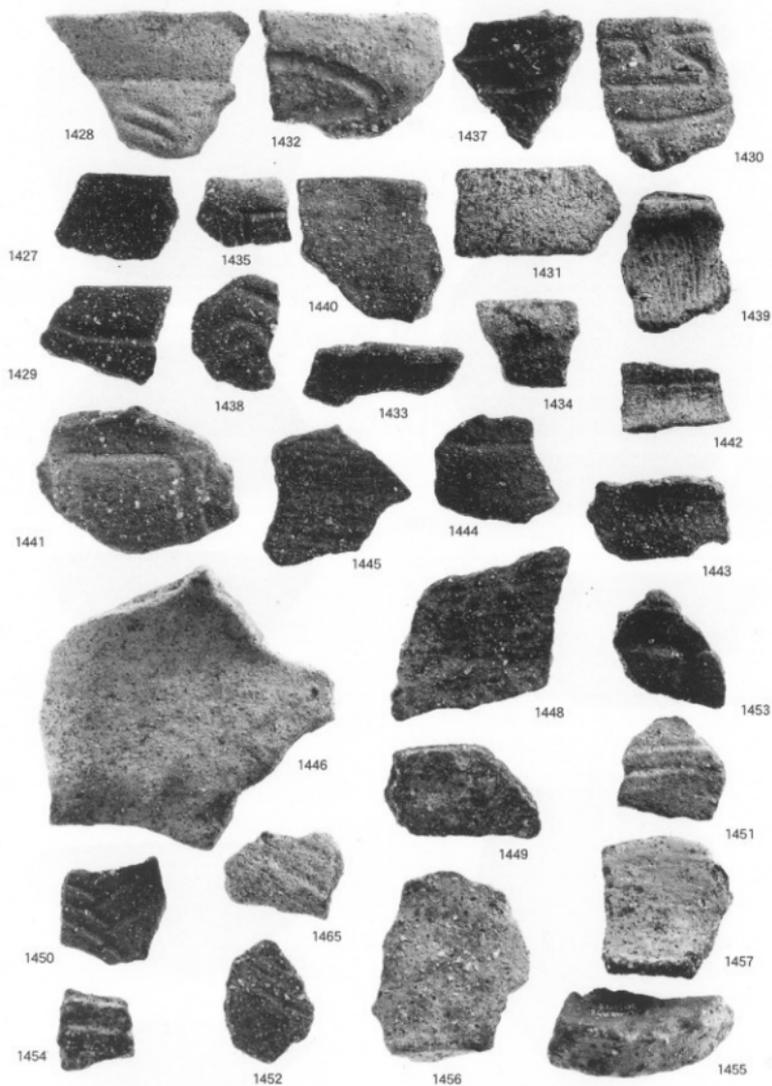
1359



1399



1416



出土遺物(12)



1418



1476



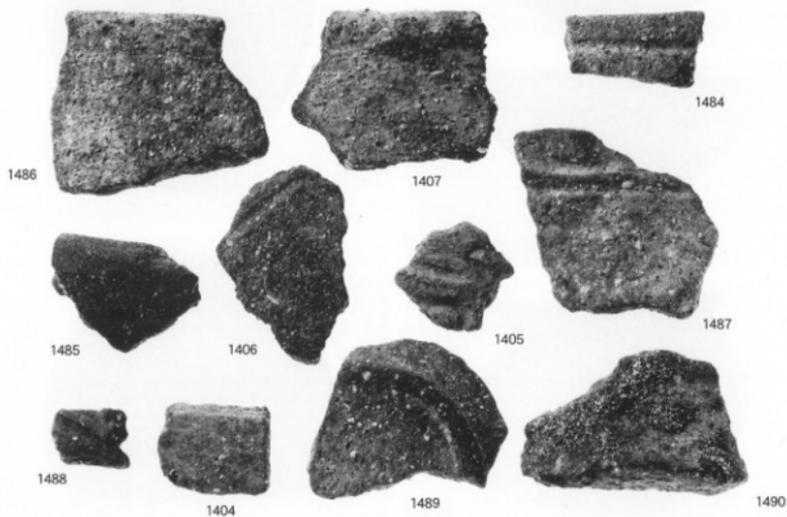
1497



1475



1501



出土遺物(13)



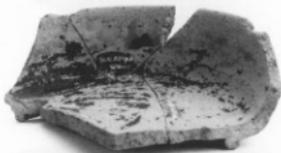
1504



1521



1505



1522



1514



1530



1515



1517



1531



1536



1539



1537



1543



1538



1592





報告書抄録

ふりがな	しんでんほんむらいせき							
書名	新田本村遺跡							
副書名	都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査報告書 第三冊							
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第95集							
編集者名	大嶋和則 中西克也							
編集機関	高松市教育委員会							
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL.087(839)2636							
発行年月日	2006年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
しんでんほんむらいせき 新田本村遺跡	ふかまつし 高松市 しんでんほんむらいせき 新田町	37201		34° 19' 31" (世界測 地系)	134° 6' 15"	1996.12.2 ~ 1997.4.11 1997.10.22 ~ 1997.12.12	4,900 ㎡	道路 建設
収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
新田本村遺跡	集落	弥生時代	溝、土坑	弥生土器				
		古代	掘立柱建物跡、溝、井戸、土坑、柱穴	土師器、須恵器、越州窯青磁、青磁、緑釉瓦、硯、土馬		官衙関連遺跡		
		江戸時代	掘立柱建物跡、溝、井戸、土坑、柱穴、竈跡	陶磁器、土師質土器				

都市計画道路室町新田線埋蔵文化財
発掘調査報告書 第二冊

新田本村遺跡

編集・発行 高松市教育委員会
高松市番町一丁目8番15号
発行日 平成18年3月31日
印刷 有限会社 中央ファイリング

付図2 新田本村遺跡平面図2

